

Oracle® Enterprise Performance Management System

Backup and Recovery Guide

リリース 11.1.2.3

Oracle および Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS:

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことにより起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

| | |
|---|-----------|
| ドキュメントのアクセシビリティについて | 5 |
| 第 1 章 バックアップと回復について | 7 |
| 必要な知識 | 7 |
| リポジトリ、データベースおよびファイル・システム | 7 |
| データベースのバックアップ・タイプ | 7 |
| ファイル・システムのバックアップ・タイプ | 9 |
| 回復順序 | 10 |
| 第 2 章 共通バックアップ・タスク | 11 |
| バックアップの準備 | 11 |
| データベースのバックアップ | 11 |
| ファイル・システムのバックアップ | 12 |
| OS 設定のバックアップ | 14 |
| Windows レジストリ設定のバックアップ | 14 |
| システム変数のバックアップ | 15 |
| 第 3 章 Foundation Services | 17 |
| EPM Workspace と Shared Services | 17 |
| ファイル・システムのバックアップ | 17 |
| EPM Workspace および Shared Services の復元 | 18 |
| データベースのバックアップ | 18 |
| 別のサーバーへのデータベースの復元 | 18 |
| Performance Management Architect | 19 |
| Calculation Manager | 20 |
| Smart View | 20 |
| 第 4 章 Essbase コンポーネント | 21 |
| Essbase | 21 |
| アップグレード前のセキュリティ・ファイルのバックアップ | 21 |
| ブロック・ストレージ・データベースのバックアップおよびリカバリ ... | 22 |
| 環境変数値の保持 | 46 |
| 集約ストレージ・アプリケーションのバックアップと復元 | 46 |
| パーティション定義のエクスポートとインポート | 47 |

| | |
|--|-----------|
| Integration Services | 48 |
| Essbase Studio | 48 |
| Provider Services | 48 |
| 第 5 章 Financial Performance Management アプリケーション | 51 |
| Planning | 51 |
| Disclosure Management | 52 |
| Financial Close Management | 53 |
| Financial Management | 53 |
| Performance Scorecard | 54 |
| Profitability and Cost Management | 55 |
| Strategic Finance | 56 |
| 第 6 章 Reporting and Analysis | 57 |
| Reporting and Analysis ファイル・システムのバックアップ | 57 |
| Reporting and Analysis サービスの一時停止 | 58 |
| Reporting and Analysis の復元 | 59 |
| Dashboard Development Services | 59 |
| Financial Reporting | 60 |
| Production Reporting | 60 |
| 第 7 章 データ管理 | 61 |
| Data Relationship Management | 61 |
| FDM | 62 |
| FDMEE | 62 |
| 索引 | 63 |

ドキュメントのアクセシビリティについて

Oracle のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc> を参照してください。

Access to Oracle Support

Oracle サポート・サービスでは、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> か、聴覚に障害のあるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

1

バックアップと回復について

この章の内容

| | |
|-------------------------------|----|
| 必要な知識..... | 7 |
| リポジトリ、データベースおよびファイル・システム..... | 7 |
| 回復順序..... | 10 |

必要な知識

このガイドは、Oracle Enterprise Performance Management System 製品をインストール、構成および管理する管理者を対象としています。次のスキルと知識を有していることが前提条件となります:

- セキュリティおよびサーバーの管理スキル
- Windows または UNIX の管理スキル(使用 OS に応じて)
- Web アプリケーション・サーバー管理スキル
- Oracle Internet Directory、Lightweight Directory Access Protocol(LDAP)、Microsoft Active Directory、Secure Sockets Layer(SSL)の使用など、認証プロバイダを含む、所属組織のセキュリティ構造に関する深い知識
- リレーショナル・データベース管理システム(RDBMS)に関する熟練した管理スキル
- ファイル・システムを含む所属組織のデータベースおよびサーバー環境に関する深い理解
- 所属組織のネットワーク環境やポート使用に関する深い理解

リポジトリ、データベースおよびファイル・システム

EPM System 製品の多くはリポジトリを使用します。ここには、製品が必要とするアイテムが含まれます。リポジトリのコンテンツは製品によって異なります。製品リポジトリによって、RDBMS を使用するもの、ファイル・システムを使用するもの、RDBMS とファイル・システムの両方を使用するものがあります。

データベースのバックアップ・タイプ

コンピューティング環境に応じて、複数のデータベース・バックアップ・タイプを使用できます。

Oracle Database のバックアップおよびリカバリの詳細は、http://www.oracle.com/technology/dep/availability/htdocs/BR_Overview.htm を参照してください。

物理バックアップ

物理バックアップは、物理データベース・ファイルのコピーです。たとえば、ローカル・ディスク・ドライブからデータベース・コンテンツを別の安全な場所にコピーすることは物理バックアップになります。

物理バックアップでは、ホット・バックアップとコールド・バックアップが可能です:

- ホット・バックアップ - ホット・バックアップ中、ユーザーはデータベースを変更できます。バックアップ中に行われた変更はログ・ファイルに保存され、このロギングされた変更が適用されて、データベースとバックアップ・コピーとの同期が行われます。ホット・バックアップは、完全バックアップが必要であり、コールド・バックアップのようなシステム・ダウンタイムがサービス・レベルで許可されていない場合に使用します。
- コールド・バックアップ - コールド・バックアップ中、ユーザーはデータベースを変更できないので、データベースとバックアップ・コピーは常に同期します。コールド・バックアップは、必要なシステム・ダウンタイムがサービス・レベルで許可されている場合にのみ使用します。

物理バックアップでは、完全バックアップと増分バックアップを実行できます:

注: コールド完全物理バックアップをお勧めします。

- 完全 - 制御ファイル、トランザクション・ファイル(REDO ログ)、アーカイブ・ファイル、データ・ファイルなどのデータベースの一部が含まれるデータ・コピーを作成します。このバックアップ・タイプでは、元のデータを復元できるので、アプリケーション・エラーからデータを保護し、予想外の損失を防げます。このバックアップは、データの変更頻度に応じて、1週間または2週間に1度行ってください。バックアップ中ユーザーによる変更ができない完全コールド・バックアップをお勧めします。

注: データベースは、完全物理バックアップの際には必ずアーカイブ・ログ・モードであることが必要です。

- 増分 - 最後の完全物理バックアップの後に行われた変更のみバックアップします。ファイルはデータベースによって異なりますが、原則的には、最後のバックアップ以降作成されたトランザクション・ログ・ファイルのみアーカイブされます。増分バックアップでは、データベースの使用中にホット・バックアップを行うことも可能ですが、データベース・パフォーマンスが低下します。

バックアップに加え、クラスタリングやログ・.shippingを使用してデータベース・コンテンツを保護することを検討してください。Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide および RDBMS のドキュメントを参照してください。

論理バックアップ

論理バックアップはデータをコピーしますが、ある場所から別の場所に物理ファイルをコピーすることはしません。論理バックアップは、データベース、テーブルまたはスキーマを移動またはアーカイブしたり、データベース構造を確認したりするために使用します。

完全論理バックアップでは、オペレーティング・システムなどの使用するコンポーネントが異なる環境間で次のアイテムをコピーできます:

- アプリケーション全体
- Oracle Hyperion Shared Services レジストリおよび Oracle Essbase キューブなどのデータ・リポジトリ
- スクリプト、データ・フォーム、ルール・ファイルなどの個々のアーティファクト

論理エクスポート・バックアップでは、バイナリ・ファイルに書き込むすべてのテーブル・データを取得するために必要な SQL ステートメントが生成されます。論理エクスポート・バックアップには、物理ディスクの場所など、データベース・インスタンス関連情報が含まれないので、別のデータベース・マシンに同じデータを復元できます。物理バックアップが失敗したり、データベース・マシンに障害が発生した場合に備えて、定期的な論理エクスポート・バックアップ(少なくとも1週間に1度)をお勧めします。

ライフサイクル管理によるバックアップ

Oracle Hyperion Foundation Services とともに提供される Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理を使用して、論理バックアップを実行できます。Oracle Enterprise Performance Management System Lifecycle Management Guide を参照してください。

ファイル・システムのバックアップ・タイプ

ファイル・システムの完全バックアップには、システム・ディレクトリ全体が含まれます。たとえば、EPM Oracle ホーム・ディレクトリのバックアップでは、インストール済の EPM System 製品がすべてバックアップされます。次のタイプと頻度のファイル・システム・バックアップを実行することもできます:

- インストール後 - 製品を再構成する場合に作成または変更されたディレクトリ
- 日次増分 - 前日以降の新規の、または変更されたディレクトリとファイル(リポジトリ・コンテンツとログ・ファイルを含む)
- 週次完全 - 日次増分バックアップを実行するディレクトリ内のすべてのファイル
- 必要に応じて - 不定期に変更されるデータ

回復順序

Oracle Hyperion Shared Services、および Shared Services 用にバックアップしたコンポーネントを復元してから、他の製品を復元します。

注意 EPM System コンポーネントは、Shared Services リポジトリとの間で情報の読取りおよび書込みを頻繁に行うため、EPM System コンポーネントのバックアップと復元操作を同期させることが重要です。たとえば、バックアップから Shared Services を復元する場合は、同時に作成したバックアップから登録済 EPM System コンポーネントを復元する必要もあります。

この章の内容

| | |
|------------------------|----|
| バックアップの準備 | 11 |
| データベースのバックアップ | 11 |
| ファイル・システムのバックアップ | 12 |
| OS 設定のバックアップ | 14 |

バックアップの準備

コールド・バックアップを開始する前に次のタスクを完了しておく必要があります:

- 製品を停止し、すべてのユーザーがログオフしていることを確認します。
- すべての関連サービスを停止します。Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide の EPM System 製品の起動および停止に関する項を参照してください。
- Foundation Services データベースをバックアップします。

注: EPM System 製品に対してホット・バックアップを実行することもできますが、いくつかの制限があります。これらについてはこのガイドの後半で説明します。これらのバックアップは同時に実行する必要があります。

データベースのバックアップ

次のデータベースをバックアップします:

- EPM System アプリケーション・データが保管されるデータベース
- Shared Services リポジトリ

Shared Services リポジトリには、ほとんどの製品の構成設定を格納する Shared Services レジストリが含まれます。また、ネイティブ・ディレクトリ、プロビジョニング情報および Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace のプリファレンスも含まれます。インストールおよび構成の直後に完全な物理バックアップを行うことをお勧めします。

個々の EPM System コンポーネントをバックアップする手順については、このガイドのコンポーネント固有の項を参照してください。Foundation Services をバック

アップする手順については、17 ページの「EPM Workspace と Shared Services」を参照してください。

製品アプリケーションで使用するデータの保管または抽出に使用するデータベースも、ベンダーのドキュメントに従ってバックアップします。次の EPM System コンポーネントについては、データベース・コンテンツの定期的なバックアップをお勧めします:

- Foundation Services
- Oracle Hyperion Disclosure Management
- Oracle Hyperion Calculation Manager
- Oracle Hyperion Dashboard Development Services
- Oracle Data Relationship Management
- Oracle Hyperion EPM Architect
- Oracle Hyperion Financial Management
- Oracle Hyperion Financial Close Management
- Oracle Hyperion Performance Scorecard
- Oracle Hyperion Planning
- Oracle Hyperion Profitability and Cost Management
- Oracle Hyperion Reporting and Analysis
- Oracle Hyperion Financial Data Quality Management
- Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Enterprise Edition

次の製品はリポジトリ・データベースを使用しません:

- Oracle Hyperion SQR Production Reporting
- Oracle Hyperion Smart View for Office
- Oracle Hyperion Provider Services
- Disclosure Management

ファイル・システムのバックアップ

次の EPM System 製品には、ファイル・システムの定期的なバックアップをお勧めします:

- Oracle Hyperion Foundation Services
- Dashboard Development Services
- Data Relationship Management
- Disclosure Management
- FDM
- Financial Management

- Performance Management Architect
- Oracle Hyperion Performance Scorecard
- Planning
- Profitability and Cost Management
- Reporting and Analysis
- Oracle Hyperion Strategic Finance
- Oracle Hyperion SQR Production Reporting

次のアイテムを毎日バックアップすることをお勧めします:

- EPM_ORACLE_INSTANCE/config (Shared Services レジストリに書き込まれている構成と再構成の設定をバックアップ)
- MIDDLEWARE_HOME/user_projects/domains/domain name (EPM System WebLogic ドメイン・ディレクトリ)

注: このアイテムは、Web アプリケーション・サーバーを必要とする製品に対してのみ適用されます。

- EPM_ORACLE_INSTANCE/import_export (Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理のコンテンツがある場所)
- 製品アプリケーションとアプリケーション・データ
- Windows 環境:
 - Windows レジストリ: HKEY_LOCAL_MACHINE とそのすべてのサブキー

注: いくつかの EPM System コンポーネントについては、固有のサブキーのみをバックアップする必要があります。これらについては、各コンポーネントのバックアップ手順を参照してください。

Windows レジストリをバックアップしておくこと、Windows を再インストールしたときに、システム・リカバリが使用可能になります。14 ページの「OS 設定のバックアップ」を参照してください。

次の製品には適用できません:

- Oracle Hyperion SQR Production Reporting サーバー
- Smart View
- Provider Services

14 ページの「OS 設定のバックアップ」を参照してください。

- %CommonProgramFiles%/InstallShield/Universal
- %USERPROFILE%/oracle.instance (製品の追加、除去、再インストールおよびアップグレードを可能にします)
- UNIX 環境:

- `.oracle.instances` (製品の追加、除去、再インストールおよびアップグレードを可能にします)
- `$HOME/InstallShield/Universal`
- `$HOME/oraInventory`
- ユーザー・プロファイルなどのファイル、カーネル調整パラメータ、編集した `.init` ファイル
- `/etc` (システムレベル設定)
- ユーザー・ホーム・ディレクトリ (非表示のファイルとサブディレクトリ内のユーザーレベル設定)
- `/usr`、`/lib`、`/platform` (静的システム情報)
- `/var` (システム・ログとスプール)

ユーザー・ホーム・ディレクトリと、アプリケーション固有のディレクトリまたはファイル・システムをバックアップする必要があります。復元手順を定期的にテストすることをお勧めします。

新しい製品をインストールする場合やパッチを適用する場合は、(インストールしたすべての製品をバックアップするために)EPM Oracle ホーム・ディレクトリをバックアップします。

ディレクトリとファイルは、別の場所にコピーしてバックアップします。OS 付属のユーティリティ (Windows 2003 バックアップ・ユーティリティなど) や、サードパーティのバックアップ・ユーティリティを使用することもできます。障害時には、これらのコピーを元の場所に戻すことにより復元を行います。

OS 設定のバックアップ

Windows のレジストリ設定と、Windows および UNIX 環境の特定のシステム変数をバックアップする必要があります。

Windows レジストリ設定のバックアップ

Windows レジストリ (`HKEY_LOCAL_MACHINE` とそのサブキー) をバックアップしておくと、Windows の再インストール時にシステム・リカバリが使用可能になります。

注： いくつかの EPM System コンポーネントについては、固有のサブキーのみをバックアップする必要があります。これらについては、各コンポーネントのバックアップ手順を参照してください。

Windows の `regedit` コマンドを使用してレジストリ・ファイルを作成することにより、システムと製品コンポーネントをバックアップできます。障害が発生したら、レジストリ・ファイルを実行して、コンポーネントを復元できます。

注： 次の手順は、Oracle Hyperion SQR Production Reporting Server、Smart View または Provider Services には適用されません。

▶ regedit でコンポーネントをバックアップするには:

- 1 「スタート」、「ファイル名を指定して実行」の順に選択します。
- 2 regedit と入力し、「OK」をクリックします。
- 3 左側のパネルでコンポーネントのサブキーを右クリックし、「エクスポート」を選択します。
- 4 レジストリ・ファイルの保存先を選択し、.reg 拡張子付きのファイル名を入力し、「保存」をクリックします。

システム変数のバックアップ

HYPERION_HOME および EPM_ORACLE_HOME システム変数をバックアップすることをお勧めします。

注： この推奨事項は Smart View には適用されません。

この章の内容

| | |
|--|----|
| EPM Workspace と Shared Services..... | 17 |
| Performance Management Architect | 19 |
| Calculation Manager | 20 |
| Smart View | 20 |

EPM Workspace と Shared Services

EPM Workspace と Shared Services では、ファイル・システムとデータベースが共有されます。

注： Shared Services のバックアップは、プロビジョニング・データを保持するため、製品のバックアップと同期する必要があります。

ファイル・システムのバックアップ

▶ EPM Workspace と Shared Services のファイル・システムをバックアップするには:

1 EPM Workspace をインストールまたは再構成した後に、ストレージ・デバイスまたは別のネットワークの場所に次のフォルダをコピーします:

- EPM_ORACLE_INSTANCE
- MIDDLEWARE_HOME /user_projects/domains/ domain name

注： これは、マシンにインストールおよび構成された Oracle Enterprise Performance Management System の全コンポーネントを対象とした 1 回だけのバックアップです。

2 EPM_ORACLE_INSTANCE/config の次のサブフォルダについて、週次完全バックアップまたは日次増分バックアップを実行します:

- FoundationServices
- Foundation

注： EPM_ORACLE_INSTANCE/config/foundation の 11.1.2.0 サブフォルダには、回復に必要な .reg.properties が含まれています。

- 3 **オプション:** 履歴情報のみを含む MIDDLEWARE_HOME/user_projects/domains/domain name/servers/managed server name/logs の月次バックアップまたは週次バックアップを実行します。

EPM Workspace および Shared Services の復元

- ▶ 障害後に EPM Workspace と Shared Services を復元するには:
 - 1 Shared Services レジストリを含む、バックアップしたすべてのコンポーネントを回復します。
コピーされたディレクトリとファイルを元の場所に配置します。
 - 2 すべての製品と関連サービスを再起動します。Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide の EPM System 製品の起動および停止に関する項を参照してください。

データベースのバックアップ

- ▶ EPM Workspace と Shared Services のデータベースをバックアップするには:
 - 1 データベース・システム・テーブルに移動します。
 - 2 Oracle RDBMS を使用する場合は Shared Services および EPM Workspace スキーマをバックアップし、それ以外の場合は SQL Server あるいは DB2 データベースをバックアップします。

別のサーバーへのデータベースの復元

あるサーバーのデータベースをバックアップし、(たとえば、1つ目のデータベース・サーバーが保守中であるために)2つ目のサーバーに復元する場合、WebLogic 管理コンソールを使用してデータ・ソースと reg.properties ファイルを更新する必要があります:

- ▶ 別のサーバーへデータベースを復元するには:
 - 1 データ・ソースを更新します:
 1. WebLogic 管理コンソールから、「サービス」、「dataSource」、
「EPMSysRegistry」の順に選択します。
 2. 「接続プール」タブで、2つ目のサーバーのユーザー名、パスワードおよび JDBC URL を指定します。
 3. 「保存して変更をアクティブ化」をクリックします。
 - 2 テキスト・エディタで reg.properties を開き、ユーザー名、パスワードおよび JDBC サーバー URL を更新します。

reg.properties ファイルは、EPM_ORACLE_INSTANCE/config/foundation/11.1.2.0 にあります。

- 3 Shared Services を開始します。

Performance Management Architect

Performance Management Architect データベースは定期的にバックアップする必要があります。7 ページの「データベースのバックアップ・タイプ」を参照してください。

構成設定を変更した場合は、ファイル・システムもバックアップします。12 ページの「ファイル・システムのバックアップ」を参照してください。

▶ 障害からの回復を使用可能にするには:

- 1 第2章「共通バックアップ・タスク」を参照して、Performance Management Architect データベースと、必要に応じて、Performance Management Architect ファイル・システムをバックアップします。
- 2 定期的に `EPM_ORACLE_HOME/products/Foundation/BPMA/AppServer/DimensionServer/ServerEngine/bin/bpma_server_config.xml` をバックアップします。

▶ 障害から回復するには:

- 1 バックアップした Oracle Hyperion EPM Architect データベースを復元します。
- 2 構成の設定を回復するには、バックアップしたファイル・システムを復元します。
- 3 `EPM_ORACLE_HOME/products/Foundation/BPMA/AppServer/DimensionServer/ServerEngine/bin/services_build_helper.exe` `INSTALL PROD` を実行することによって、次元サービス・サーバーをインストールします。
- 4 Internet Information Services (IIS)の `hyperion-bpma-server` に対して次のフォルダを参照する仮想ディレクトリを作成します:
`EPM_ORACLE_HOME /products/Foundation/BPMA / AppServer/DimensionServer /WebServices`
- 5 Web アプリケーションの Microsoft .NET Framework バージョンが 2.0 であることを確認し、ASP.NET 2.0 拡張を使用可能にします。
- 6 `C:/Documents and Settings/All Users/Application Data` への書き込みアクセスが `NETWORK SERVICE` ユーザーに対して使用可能になっていることを確認します。
- 7 `EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/deploymentScripts/installServiceScripts` 内の次のスクリプトを実行して、J2EE Web 層サービスをインストールします:
 - `installServiceEPMDataSync.bat`
 - `installServiceEPMAWebServer.bat`
- 8 製品と関連サービスを再起動します。

Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide の EPM System 製品の起動および停止に関する項を参照してください。

Calculation Manager

障害後の回復を可能にするために必要なのは、RDBMS のドキュメントで説明されている手順に従って、Oracle Hyperion Calculation Manager で使用するデータベースをバックアップすることのみです。また、万一の備えとして、次のことができます:

- EPM_ORACLE_HOME/products/Foundation/CALC 内の製品コンポーネントをバックアップします。
- MIDDLEWARE_HOME/user_projects/domains/domain name/servers/managed server name/logs の週次完全バックアップまたは日次増分バックアップを実行します。

Smart View

- ▶ 障害後に Smart View の回復を使用可能にするには、Smart View のデータを含む Microsoft Office ドキュメントを別の場所にコピーします。

次のファイル・タイプが含まれます:

- XLS と XLSX (Excel)
 - DOC と DOCX (Word)
 - PPT と PPTX (PowerPoint)
- ▶ 障害から回復するには、バックアップされた Microsoft Office ドキュメントを元の場所に戻します。

この章の内容

| | |
|----------------------------|----|
| Essbase | 21 |
| Integration Services | 48 |
| Essbase Studio | 48 |
| Provider Services | 48 |

Essbase

定期的な Essbase バックアップを本番サーバーの保守に組み込むことは、データベースの保守にとって非常に重要です。バックアップの頻度は、データベースとサーバー環境の不安定さと、サーバーの中断が発生したときに迅速にデータベースを復元することが必要かどうかによって異なります。

復元とは、バックアップが実行されたときの状態にデータベースを戻すプロセスです。ブロック・ストレージ・データベースの場合は、Essbase の自動化されたバックアップと復元の機能を使用するか、手動操作を行えます。集約ストレージ・データベースの場合は、手動のバックアップと復元の機能を使用する必要があります。

回復とは、バックアップが実行された後に発生したトランザクションを含む、バックアップ後の状態にデータベースを戻すプロセスです。データベースを回復するには、自動化されたバックアップと復元の機能と自動化されたトランザクション・ロギングと再実行の機能を使用する必要があります。

この項で説明する MaxL ステートメントと管理サービス・コンソールのオプションの詳細は、Oracle Essbase Technical Reference と『Oracle Essbase Administration Services オンライン・ヘルプ』をそれぞれ参照してください。

アップグレード前のセキュリティ・ファイルのバックアップ

旧リリースから Essbase 11.1.2.2 にアップグレードするときに、セキュリティ・ファイルがアップグレードされる前に、旧リリースのセキュリティ・ファイルのバックアップが作成されます。セキュリティ・ファイルのバックアップ、Essbase.Bak_preUpgrade は ARBORPATH/bin にあります。Essbase セキュリティの最新の状態を定期的にバックアップする essbase_timestamp.bak とは異なり、このアップグレード前のバックアップ・ファイルはそのまま保持され、さらなる操作によって更新されません。

ブロック・ストレージ・データベースのバックアップおよびリカバリ

ブロック・ストレージ・データベースをバックアップおよび復元するには、次のいずれかの方法を使用します:

- 自動化されたデータベースのバックアップと復元およびトランザクション・ロギングと再実行

バックアップと復元は、手動でデータベースをバックアップして復元するのと同じ機能を提供します。バックアップされたデータベースを復元すると、バックアップ後に発生したトランザクションは回復されません。しかし、トランザクション・ロギングと再実行により、バックアップ後のトランザクションをキャプチャして再実行できます。これにより、バックアップされたデータベースを、中断が発生する前の最新の状態に回復できます。

データベースのバックアップおよび復元と、トランザクションのロギングおよび再生機能を使用すると、手動による様々な手順が不要になるため、管理者はデータベースをより効率的にバックアップおよびリカバリできるようになります。これらの機能をバックアップおよびリカバリ戦略に組み込むことをお勧めします。

参照:

- [22 ページの「ブロック・ストレージ・データベースの完全回復の順序」](#)
 - [23 ページの「ブロック・ストレージ・データベースに対するバックアップと復元の使用方法」](#)
 - [31 ページの「ブロック・ストレージ・データベースに対するトランザクション・ロギングと再実行の使用方法」](#)
- 手動によるバックアップと復元
- 手動操作によるバックアップと復元の戦略をすでにデザインし、トランザクション・ロギングと再実行の機能を必要としない Essbase カスタマは、引き続き、手動操作による戦略を利用できます。

[39 ページの「手動によるバックアップと復元」](#) を参照してください。

ブロック・ストレージ・データベースの完全回復の順序

バックアップからデータベースを復元すると、復元されたデータベースの状態は、バックアップが実行されたときとまったく同じ状態になります。バックアップ後に発生したトランザクションは一切回復されません。トランザクション・ロギングでは、進行中のトランザクションがキャプチャされます。これらのトランザクションを再実行して、最新の状態にデータベースを回復できます。

この2つの機能を使用する一般的な順序では、最初にトランザクション・ロギングを使用可能にして、次にデータベースをバックアップします。バックアップされたデータベースを復元してから、バックアップ操作後に発生したロギングされたトランザクションを再実行できます。

アウトラインとデータを一緒にリセットするトランザクション(たとえば、ロードされているデータをすべて消去して、アウトラインを空にリセットするトランザク

クシヨ)は、ロギングと再実行ができます。ロギングと再実行ができるトランザクシヨンのリストについては、表 5 を参照してください。

アウトラインの変更はロギングされないので、再実行できません。ただし、アウトラインそのものはバックアップの一部として保存できます。データベースをバックアップした後にアウトラインを変更した場合は、データベースを復元してからロギングされたトランザクシヨンを再実行するまでの間に、復元したデータベースに、更新したアウトラインをコピーする必要があります。アウトラインの非同期を回避するには、アウトラインを変更するたびに、データベースをバックアップすることをお勧めします。データベースをバックアップせずにデータベースのアウトラインを変更する場合は、変更したアウトラインを手動でコピーする必要があります。これによって、トランザクシヨンを再実行する前に、更新したアウトラインを復元したデータベースにコピーできます。

表 1 に、これらの機能を組み合わせて使用方法を示します。

表 1 バックアップと復元およびトランザクシヨンのロギングと再実行を使用する順序の例

| 期間 | (シーケンスID)トランザクシヨまたはイベント |
|-----------------|--|
| T ₀ | トランザクシヨンのロギングを使用可能にする。 |
| T ₁ | (1) データ・ロードを実行する。 |
| T ₂ | (2) データベースを計算する。 |
| T ₃ | (3) データベースをバックアップする。 |
| T ₄ | (4) 別のデータ・ロードを実行する。 |
| T ₅ | (5) スプレッドシート内のセルを更新し、ロックと送信を実行して、データベースを更新する。 |
| T ₆ | (6) データベースを計算する。 |
| T ₇ | システム障害により、データベースが破損する。 |
| T ₈ | T ₃ で取ったデータベースのバックアップを復元する。 復元したデータベースには、シーケンス ID 1 と 2 のトランザクシヨンの結果は含まれているが、4、5、6 は含まれていない。 |
| T ₉ | シーケンス ID 4、5 および 6 のトランザクシヨンを再実行する。 これらのトランザクシヨンは、バックアップが T ₃ で実行されてからデータベースが T ₇ で破損するまでの間に発生したもので、データベースが T ₈ で復元された時点では、回復されていなかった。 |
| T ₁₀ | (7) 回復したデータベースをバックアップする。 |
| T ₁₁ | データベース・アウトラインを変更する。 |
| T ₁₂ | (8) データベースをバックアップするか、変更したアウトラインを手動で保存する。 |

ブロック・ストレージ・データベースに対するバックアップと復元の使用方法

バックアップと復元の機能は、ブロック・ストレージ・データベースに適用されます。

データベースをバックアップおよび復元するには、管理者役割が必要です。

データベースのバックアップ中、Essbase は次のタスクを実行します:

1. データベースを読取り専用モードにし、アーカイブ・プロセス中のデータベースの更新を禁止する一方、データベースへの照会要求を許可します。
2. 表 2 に示されているデータベース・ファイルのコピーを Essbase サーバー・コンピュータ上にあるアーカイブ・ファイルに書き込みます。

25 ページの「データベース・アーカイブ・ファイルの構成と指定」を参照してください。

3. データベースが読取り書き込みモードに戻ります。

表 2 に、自動的にバックアップされる Essbase データベース・ファイルを示します。

表 2 自動的にバックアップされる Essbase データベース・ファイル

| ファイル | 説明 |
|------------------|---|
| ess xxxxxx .pag | Essbase データ・ファイル たとえば、ess00001.pag |
| ess xxxxxx .ind | Essbase インデックス・ファイル たとえば、ess00001.ind |
| dbname .esm | データベースの回復に使用される制御情報とディスク・ボリューム情報が含まれる Essbase カーネル・ファイル |
| dbname .tct | トランザクション制御テーブル |
| dbname .ind | データおよびインデックスのフリー・フラグメント用のフリー・フラグメント・ファイル |
| dbname .otl | アウトライン・ファイル。データベースのすべてのメタデータを保管し、データの保管方法を定義するが、データそのものは保管しない |
| dbname .otl.keep | dbname.otl の一時バックアップ(アウトラインを変更し、新しいファイルに書き込む操作により作成される) |
| x .lro | リンクされたレポート・オブジェクト |
| dbname .otn | 次元構築中またはアウトライン編集に作成される一時アウトライン・ファイル |
| dbname .db | データベース設定を含むデータベース・ファイル |
| dbname .ddb | パーティション定義ファイル |
| dbname .ocl | 増分次元構築中に作成されるアウトライン変更ログ |
| ess xxxxx .chg | アウトライン同期変更ログ |
| dbname .alg | スプレッドシート更新トランザクションを、データ・ロードの入力ソースとして使用される 1 つの単位として保管する、スプレッドシート更新ログ |
| dbname .atx | 各トランザクションの履歴情報(ユーザー名、日付、タイムスタンプなど)、および.atx ファイルでのトランザクション行の番号を含む、スプレッドシート更新ログ |

Essbase がバックアップするファイルに加え、表 3 に示されているファイルについては、手動でバックアップする必要があります。これらのファイルは、データベース・バックアップの実行後(数日後など)、手動でバックアップする必要があります。また、ルール・ファイルや ESSCMD または MaxL スクリプトを作成したり、変更したりした場合は、それらもバックアップしておく必要があります。

表 3 に、手動でバックアップする必要がある Essbase データベース・ファイルを示します。

表 3 手動でバックアップする必要がある Essbase ファイル

| ファイル | 説明 | 場所 |
|--|----------------------------|---------------------------------------|
| essbase.sec ¹ | Essbase セキュリティ・ファイル | ARBORPATH /bin/ |
| essbase_timestamp .bak | Essbase セキュリティ・ファイルのバックアップ | ARBORPATH /bin/ |
| essbase.cfg | Essbase サーバー構成ファイル | ARBORPATH /bin/ |
| dbname .app | アプリケーション設定を含むアプリケーション・ファイル | ARBORPATH /app/ |
| .otl .csc .rul .rep .eqd .sel | データベース・アーティファクト・ファイル | ARBORPATH /app/ appname / dbname / |
| ESSCMD または MaxL スクリプト | | 指定されている格納場所はありません。 |

¹essbase.sec をバックアップする前にエージェントをシャット・ダウンしてください。

データベース・アーカイブ・ファイルの構成と指定

データベースのバックアップ中、Essbase は、データベース・ファイルを Essbase サーバー・コンピュータ上のアーカイブ・ファイルにコピーします。アーカイブ・ファイルの名前と場所を指定する場合は、次のガイドラインに従います:

- Essbase サーバー上のディレクトリへの完全パスと、アーカイブ・ファイル名を指定します。
アーカイブ・ファイル名のみが指定されている場合は、Essbase はアーカイブ・ファイルを ARBORPATH/app に書き込みます。
- アーカイブ・ファイルは ARBORPATH が置かれているディスク以外のディスク上に書き込むことをお勧めします。
- アーカイブ・ファイル名は .arc 拡張子付きの名前にすることをお勧めします。
- アーカイブ・ファイルを複数のファイルに分割する場合を除き、アーカイブ・ファイルのサイズはバックアップするデータベースのサイズに対応し、ディスク・スペースによってのみ制限を受けます。(26 ページの「アーカイブ・

ファイルの複数のファイルへの分割」を参照)。単一ファイル構成の場合、大きなファイルをサポートするファイル・システムにアーカイブ・ファイルを保存することをお勧めします。

Windows の場合は、ファイル・システムは NTFS としてフォーマットされていることが必要です。UNIX の場合は、大きなファイルのサポートを使用可能にするとともに、ULIMIT 設定を使用してアーカイブ・ファイルのサイズを指定します。ULIMIT を特定のファイル・サイズに設定する場合は、データベースのサイズに基づいて、十分に大きな値を指定してください。そうでない場合は、ULIMIT を無制限に設定します。使用している OS のドキュメントを参照してください。

- アーカイブ・ファイルにデータベースをバックアップする場合は、**force** オプションを使用して、アーカイブ・ファイルを上書きします。そうでない場合は、バックアップは失敗します。

注意 **force** オプションを使用する前に、現在のアーカイブ・ファイルのコンテンツがもう必要ないことを確認してください。

アーカイブ・ファイルの複数のファイルへの分割

デフォルトでは、Essbase は、1 つの大きなアーカイブ・ファイルを作成します。使用している環境で大きなファイルを扱えない場合、またはファイル転送ツールが大きなファイルの処理に対応していない場合、アーカイブ・ファイルを 2GB 以下の複数のファイルに分割するように Essbase を構成できます。essbase.cfg ファイルで、SPLITARCHIVEFILE 構成を TRUE に設定します。

Essbase が作成した最初の(つまりメインの)アーカイブ・ファイルに、指定したファイル名が付きます(たとえば samplebasic.arc)。メイン・アーカイブ・ファイルが 2GB の制限に達すると、Essbase は別のファイルを作成します。後続の各アーカイブ・ファイルの名前付けでは、Essbase により、メイン・アーカイブ・ファイル名に"_n"が付けられます。n は整数で、1 から始まり、増分されます。たとえば、Sample.Basic データベースのバックアップでつのアーカイブ・ファイルが作成された場合、ファイル名は次のようになります:

```
samplebasic.arc
```

```
samplebasic_1.arc
```

```
samplebasic_2.arc
```

分割アーカイブ・ファイルはすべて、メイン・アーカイブ・ファイルの名前と場所を指定したときに、指定したディレクトリに作成されます。

注: アーカイブが複数のファイルに分割されているデータベースを復元する場合、バックアップ後、そのデータベースに対して SPLITARCHIVEFILE を FALSE に設定していた場合でも、Essbase は、複数のアーカイブ・ファイルを検索します。また、Essbase は、データベースのすべてのアーカイブ・ファイルが同じディレクトリにあることを前提とします。

ブロック・ストレージ・データベースのバックアップ

データベースをバックアップするには、管理者役割が必要です。

▶ データベースをバックアップするには、次のいずれかのツールを使用します:

- Oracle Essbase Administration Services

『Oracle Essbase Administration Services オンライン・ヘルプ』のブロック・ストレージ・データベースのバックアップに関する項を参照してください。

管理サービス・コンソールでは、「データベースのアーカイブ」コマンドを使用します。

- MaxL

Oracle Essbase Technical Reference のデータベースの変更に関する項を参照してください。

MaxL では、**alter database** ステートメントを **archive to file** 文法で使用します。
ステートメントの構文:

```
alter database appname.dbname [force] archive to file BACKUP-FILE;
```

たとえば、次のステートメントでは、Sample.Basic データベースが Essbase サーバー上の指定されたアーカイブ・ファイルにバックアップされます:

```
alter database Sample.Basic archive to file '/Oracle/samplebasic.arc';
```

samplebasic.arc ファイルが Essbase サーバー上に存在する場合は、**force** 文法を使用して、ファイルのコンテンツを上書きします。例:

```
alter database Sample.Basic force archive to file '/Oracle/samplebasic.arc';
```

注: データベースのバックアップとは異なるタイミングで、表 3 に示されているファイルを手動でバックアップします。

アーカイブ・ファイル情報の取得

Essbase は、アーカイブ・ファイルから、バックアップしたデータベースについて次の情報を取得できます:

- 概要情報:
 - アプリケーション名
 - データベース名
 - アーカイブ時間
- ディスク・ボリューム名

▶ アーカイブ・ファイル情報を取得するには、**query archive_file** MaxL ステートメントを使用します。

ステートメントの構文:

```
query archive_file BACKUP-FILE [get overview] [list disk volume];
```

管理サービス・コンソールの MaxL スクリプト・エディタで、クエリーの結果を表示できます。図 1 に、概要情報を示します:

図 1 アーカイブ・ファイルの概要情報

| Application | Database | Backup Time |
|-------------|----------|--------------------------|
| Sample | Basic | Thu Apr 03 10:54:21 2008 |

図 2 に、ディスク・ボリューム名を示します:

図 2 ディスク・ボリュームのアーカイブ・ファイル・リスト

| Volume |
|--------|
| C |

管理サービス・コンソールで「データベースの復元」コマンドを使用しても、ディスク・ボリューム情報を表示できます。

注: Windows では、Essbase は、ディスク・ボリュームとしてデフォルトの ARBORPATH ドライブを追加します(たとえば c: ドライブ)。これは、バックアップしたデータベースが、そのデータ・ボリューム上にデータを保管しない場合でも同様です。29 ページの「ディスク・ボリュームの操作」を参照してください。

ブロック・ストレージ・データベースの復元

データベースを復元するには、管理者役割が必要です。

データベースを復元する前に、クライアントからデータベースへのアクティブな接続を終了する必要があります。

データベースの復元時、Essbase は、データベースを空にし、ロックします。アーカイブ・ファイルのコンテンツを抽出する前に、Essbase はファイルを検証します。次に、Essbase はインデックス・ファイルとページ・ファイルを指定のディスク・ボリュームにコピーし、dbname.esm をディスク・ボリューム情報で更新します。29 ページの「ディスク・ボリュームの操作」を参照してください。

アーカイブ・ファイルを複数のファイルに分割するように Essbase を構成している場合は(25 ページの「データベース・アーカイブ・ファイルの構成と指定」を参照)、復元するメイン・アーカイブ・ファイルのファイル名(samplebasic.arc など)のみ指定する必要があります。

注: アーカイブ・ファイルが複数のファイルに分割されているデータベースを復元する場合、バックアップ後、そのデータベースに対して SPLITARCHIVEFILE を FALSE に設定していた場合でも、Essbase は、複数のアーカイブ・ファイルを探します。また、Essbase は、データベースのすべてのアーカイブ・ファイル(メインと分割)が、同じディレクトリ内にあることを前提とします。

Administration Services または MaxL を使用して、データベースを復元できます。

管理サービス・コンソールでは、「データベースの復元」コマンドを使用します。詳細は、『Oracle Essbase Administration Services オンライン・ヘルプ』のブロック・ストレージ・データベースの復元に関する項を参照してください。

MaxL では、`alter database` ステートメントを `restore from file` 文法で使用します。ステートメントの構文:

```
alter database appname.dbname [force] restore from file BACKUP-FILE
[replace disk volume VOL];
```

通常、データベースは、バックアップの作成元のアプリケーションとデータベースに対して復元されます。このため、復元するバックアップ・データベースとその関連アプリケーションのアーカイブ・ファイル内の名前も、それと同じ名前になります。バックアップ・データベースとアプリケーションの名前が、データを復元する先のアプリケーションとデータベースの名前と異なる場合は、`force` 文法を使用する必要があります。ステートメントの構文:

```
alter database appname.dbname force restore from file BACKUP-FILE;
```

たとえば、`Sample.Basic` のバックアップを `Sample.New` に復元したり(データベース名が異なる)、`MyCompany.Basic` に復元したり(アプリケーション名が異なる)、`MyCompany.New` に復元したり(アプリケーション名とデータベース名の両方が異なる)できます。

詳細は、このガイドの [27 ページの「アーカイブ・ファイル情報の取得」](#)、および [Oracle Essbase Database Administrator's Guide のトピック「alter database」](#) を参照してください。

手動でバックアップされたファイルの復元

バックアップされたデータベースを復元した後、通常は、手動でバックアップしたファイルを復元する必要はありません([表 3](#) を参照)。

次の場合は、手動でバックアップされたファイルを復元します:

- サーバーの中断によりセキュリティ・ファイルなどのファイルが破損した場合
- ロギングされたトランザクションの再実行時に問題が発生した場合(ルール・ファイルまたはスクリプトが失われるなど)

ディスク・ボリュームの操作

Essbase を、あるディスク・ボリューム上にインストールし、インデックス・ファイル(`essn.ind`)とデータ・ファイル(`essn.pag`)を他の 1 つ以上のディスク・ボリュームに保管できます。ディスク・ボリューム情報は、`dbname.esm` ファイルに保存され、データベースの復元時に、インデックス・ファイルとデータ・ファイルを正しいディスク・ボリュームにコピーするために使用されます。

データベースが使用するディスク・ボリュームを変更した場合でも、現在および以前使用されていたすべてのディスク・ボリューム情報がデータベース・ファイルに残ります。ディスク・ボリューム情報をデータベース・アーカイブ・ファイルから取得したり、管理サービス・コンソールまたは MaxL シェルでディスク・ボリューム情報を表示すると、Essbase は、そのデータベースに関連付けられてい

るすべてのディスク・ボリューム情報を表示します。加えて、EssbaseはデフォルトのARBORPATHドライブ(たとえば、Windowsでは、ARBORPATHがC:にあればC:ドライブ)をディスク・ボリュームとして表示します。27ページの「アーカイブ・ファイル情報の取得」を参照してください。

データベースを復元する際に、ディスク・ボリューム名を置き換えることができます。ただし、その際、バックアップしたデータベースとディスク・ボリューム数が同じで、ディスク・スペースも、同じかそれ以上である必要があります。

管理サービス・コンソールでは、「データベースの復元」ダイアログ・ボックスの「詳細」オプションを使用して、ディスク・ボリューム名を置き換えることができます。

alter database MaxL ステートメントを replace disk volume VOL 文法で使用する場合は、VOL 引数の有効値は、置き換えるボリュームをカンマで区切ったリストです:

- 'VOL1' with 'VOL2'
- 'VOL3' with 'VOL4'
- 'VOL5' with 'VOL6'

たとえば、次のステートメントは、samplebasic.arc アーカイブ・ファイルを使用して Sample.Basic データベースを復元し、指定されたディスク・ボリュームを置き換えます:

```
alter database Sample.Basic restore from file '/Oracle/  
samplebasic.arc' replace disk volume 'C' with 'F', 'D' with 'G', 'E'  
with 'H';
```

Unicode アプリケーションと非 Unicode アプリケーションの操作

Unicode アプリケーションと非 Unicode アプリケーションを操作している場合、Essbase では、Unicode アプリケーションからのバックアップ・データベースを非 Unicode アプリケーションに復元できません。

表 4 に、Unicode アプリケーションと非 Unicode アプリケーション間でバックアップ・データベースを復元する場合のサポートされている組合せを示します。

表 4 Unicode アプリケーション・モードと非 Unicode アプリケーション・モードによるデータベースのバックアップと復元の組合せ

| バックアップ元 | 復元先 | サポート |
|-----------|-----------|------|
| Unicode | Unicode | はい |
| Unicode | 非 Unicode | いいえ |
| 非 Unicode | 非 Unicode | はい |
| 非 Unicode | Unicode | はい |

パーティション・データベースのバックアップと復元

パーティション・データベースをバックアップおよび復元する場合は、次のガイドラインに従います:

- ソース・データベースとターゲット・データベースを同時にバックアップおよび復元します。
- バックアップしたアプリケーションまたはデータベースの名前と異なる名前のアプリケーションまたはデータベースにデータベースを復元する場合は、パーティションを再定義する必要があります。Oracle Essbase Database Administrator's Guide を参照してください。

ブロック・ストレージ・データベースに対するトランザクション・ロギングと再実行の使用方法

ブロック・ストレージ・データベースを、復元されたデータベースより後の状態に回復するには、トランザクション・ロギングを使用可能にする必要があります。トランザクションを実行すると、Essbase は、操作パラメータをログ・ストアに書き込みます。バックアップされたデータベースを復元した後で、Essbase 管理者役割を持つユーザーは、ロギングされているトランザクションのリストを表示し、これを再実行し、キャプチャされなかったデータを回復できます。

表 5 に、トランザクション・ロギングが使用可能な場合に Essbase がロギングするトランザクションをカテゴリ別に示します:

表 5 ロギングされるカテゴリ別トランザクションのリスト

| カテゴリ | トランザクション |
|---------|---|
| 計算 | <ul style="list-style-type: none">● デフォルトまたはサーバー側の計算を実行します。● クライアント側の計算を実行します。 |
| データ・ロード | <ul style="list-style-type: none">● 複数のソースから Essbase サーバーにデータをインポートします。● ロードされているデータをすべて消去し、アウトラインを空にリセットします。● ロードされているデータをすべて消去します。● クライアント側のデータ・ロードを実行します。 |
| ロックと送信 | Smart View からのデータでデータベース・セルを更新します。 |

各トランザクションのロギングされる操作パラメータは異なります。表 6 に、3 つの代表的なトランザクションでロギングされるパラメータを示します:

表 6 特定のトランザクションのロギングされるパラメータの例

| トランザクション | ロギングされるパラメータ |
|---------------|--|
| クライアント側の計算を実行 | <ul style="list-style-type: none">● 要求を送信したユーザー● 開始時間● 終了時間● シーケンス ID● RequestType● 計算スクリプトのコンテンツ |

| トランザクション | ロギングされるパラメータ |
|---------------------------------|---|
| 複数のソースから Essbase サーバーにデータをインポート | <ul style="list-style-type: none"> ● 要求を送信したユーザー ● 開始時間 ● 終了時間 ● シーケンス ID ● RequestType ● ルール・ファイルの名前と場所 ● データ・ファイルの名前と場所 ● SQL 接続情報(SQL ソースの場合) ● データ・ファイルとルール・ファイルがクライアント・コンピュータにある場合、そのファイルは Replay ディレクトリにアーカイブされます。ディレクトリ・パスが、再実行操作で使用するためにロギングされます。 <p>Essbase は、アーカイブされるデータ・ファイルとルール・ファイルのファイル名について一意の名前を自動的に生成します。たとえば、98761234.txt、98761234.rul などです。</p> |
| Smart View からのデータでデータベース・セルを更新 | <ul style="list-style-type: none"> ● 要求を送信したユーザー ● 開始時間 ● 終了時間 ● シーケンス ID ● RequestType ● 変更されたセルについての Essbase 追跡情報 |

注： Replay は予約語なので、ブロックまたは集約ストレージ・データベースの名前として使用できません。以前にデータベースに「replay」という名前を付けていた場合、トランザクション・ロギングと再実行の機能を使用可能にする前に、データベース名を変更しておく必要があります。

トランザクション・ロギングを使用可能にする

トランザクション・ロギングは、サーバー、アプリケーション、またはデータベース・レベルで使用可能にできます。

トランザクション・ロギングを使用可能にするには、Essbase がトランザクション・ログ・ストアを書き込む一元管理された場所を指定する必要があります。この場所は、Essbase サーバー上の既存のディレクトリである必要があります。

TRANSACTIONLOGLOCATION 構成設定を `essbase.cfg` に追加します。ステートメントの構文:

```
TRANSACTIONLOGLOCATION [appname [dbname]] LOGLOCATION NATIVE ENABLE
| DISABLE
```

注： NATIVE 引数は予約フィールドなので、変更しないでください。ログの場所については、ARBORPATH ディレクトリまたはディスク・ボリュームが置かれているディスク以外の物理ディスクを使用することをお勧めします。

LOGLOCATION 内に、Essbase は、トランザクション・ロギングを使用可能にするアプリケーションとデータベースに対応するサブディレクトリを次の構造で作成します:

```
LOGLOCATION /appname/dbname
```

たとえば、次のステートメントにより、**Sample** アプリケーションに関連付けられているすべてのデータベースのトランザクション・ロギングが使用可能になります:

```
TRANSACTIONLOGLOCATION Sample /Oracle/trlog NATIVE ENABLE
```

Sample.Basic データベースのトランザクションがロギングされる場合、ログ・ストアは次の場所書き込まれます:

```
/Oracle/trlog/Sample/Basic
```

トランザクション・ロギングを使用可能にするデータベース数に応じて、一元管理するトランザクション・ログの場所を複数用意することが必要になることもあります。ログの場所は、最小限にすることをお勧めします。

また、複数の TRANSACTIONLOGLOCATION ステートメントを使用することによって、よりグローバルなレベルでトランザクション・ロギングを使用可能にし、同時に、より詳細なレベルでロギングを使用不可にすることができます。こうしたオーバーライドを有効にするには、essbase.cfg ファイルで、よりグローバルな使用可能ステートメントを、より詳細な使用不可ステートメントの前に置く必要があります。

次に例を示します:

- 最初のステートメントで、Essbase サーバー上のアプリケーションと、それらの関連データベースすべてのトランザクション・ロギングを使用可能にし、2つ目のステートメントで、特定のアプリケーション(**Sample**)に関連付けられているすべてのデータベースのトランザクション・ロギングを使用不可にしています:

```
TRANSACTIONLOGLOCATION /Oracle/trlog NATIVE ENABLE
```

```
TRANSACTIONLOGLOCATION Sample /Oracle/trlog NATIVE DISABLE
```

- 最初のステートメントで、アプリケーション・レベル(**Sample**)でトランザクション・ロギングを使用可能し、2つ目のステートメントで、そのアプリケーションにおける特定のデータベース(**Basic**)のトランザクション・ロギングを使用不可にしています:

```
TRANSACTIONLOGLOCATION Sample /Oracle/trlog NATIVE ENABLE
```

```
TRANSACTIONLOGLOCATION Sample Basic /Oracle/trlog NATIVE DISABLE
```

注: トランザクション・ロギングが使用可能になっているアプリケーションまたはデータベースをコピーしたり、それらの名前を変更したりする場合、その前に、コピーまたは名前変更後のアプリケーションまたはデータベースに対してトランザクション・ロギングを使用可能にし、ソースのアプリケーションおよびデータベースに対して指定したものと同一 LOGLOCATION を指定する必要があります。

トランザクションの再実行の構成

ロギングされたトランザクションの再実行を可能にするために、Essbase は、データ・ロードとルール・ファイルのアーカイブ・コピーを ARBORPATH/app/appname/dbname/Replay に作成します。

デフォルトでは、Essbase は、クライアント・データ・ロード用のデータ・ロードとルール・ファイルのみアーカイブします。

アーカイブされるデータ型を変更するには、TRANSACTIONLOGDATALOADARCHIVE 構成設定を essbase.cfg ファイルに追加します。ステートメントの構文:

```
TRANSACTIONLOGDATALOADARCHIVE [appname [dbname]] [OPTION]
```

有効な OPTION 引数値:

- CLIENT - (デフォルト)クライアント・データ・ロード用のデータ・ロードとルール・ファイルをアーカイブします。
- SERVER - サーバー上のデータ・ロードとルール・ファイルおよび SQL サーバーのデータ・ロードをアーカイブします。

注意 サーバーのデータ・ロードは、サーバー上の Replay ディレクトリにアーカイブされているデータ・ロードとルール・ファイルを使用して再実行されます。これらのファイルの名前は変更しないでください。また、データベース・ロードとルール・ファイルのコンテンツが、再実行操作前に変更されていた場合、再実行中、変更されたデータが使用されます。したがって、回復したデータベース内のデータは元のデータと同じにはなりません。

- SERVER_CLIENT - サーバー・データとクライアント・データをアーカイブします。
- NONE - データはアーカイブされません。

NONE を選択し、クライアント・データを使用する場合、Essbase は、データ・ロードを再実行できません。トランザクションを回復するには、残りのトランザクションを再実行する前に、手動でクライアント・データをロードする必要があります。

注意 サーバー・データまたは SQL データを使用する場合で、データまたはルール・ファイルが Replay ディレクトリにないとき(たとえば、SERVER オプションまたは SERVER_CLIENT オプションを使用していない場合)、Essbase は、データ・ソース内のデータを使用して再実行します。つまり、そのデータはロードされた元のデータと同じ場合と異なる場合があります。

たとえば、次のステートメントでは、Essbase サーバー上のすべてのデータベースのサーバー・データとクライアント・データをアーカイブします:

```
TRANSACTIONLOGDATALOADARCHIVE SERVER_CLIENT
```

ロギングされたトランザクションの表示

管理者は、ロギングされたトランザクションのリストと、各トランザクションに関連付けられている情報を表示できます。次の時間以降にロギングされたトランザクションのリストを表示するように指定できます:

- 指定時間
- 前回の再実行要求が実行された時間、または最後にバックアップが復元された時間(後に発生した方)

▶ ロギングされたトランザクションを表示するには、次のツールを使用します:

| ツール | トピック | 場所 |
|-------------------------|--|--|
| Administration Services | ブロック・ストレージ・データベースのロギングされたトランザクションの表示に関する説明 | 『Oracle Essbase Administration Services オンライン・ヘルプ』 |
| MaxL | query database | Oracle Essbase Technical Reference |

管理サービス・コンソールでは、「トランザクションの表示」コマンドを使用して、[図 3](#) に示すような、トランザクションのリストを表示できます。次の属性でリストをソートできます:

- シーケンス ID
- ユーザー名
- 開始時間
- 終了時間
- 要求タイプ

図 3 ロギングされたトランザクションのリスト

| Se... | User... | Start Time | End Time | Req Type | Calcscrip... |
|-------|---------|--------------|--------------|----------------------|-----------------|
| 7 | admin | Tue Apr 0... | Tue Apr 0... | Default calculation | Default Calc... |
| 6 | admin | Tue Apr 0... | Tue Apr 0... | Spread sheet updates | |
| 5 | admin | Tue Apr 0... | Tue Apr 0... | Spread sheet updates | |
| 4 | admin | Tue Apr 0... | Tue Apr 0... | Spread sheet updates | |
| 3 | admin | Tue Apr 0... | Tue Apr 0... | Spread sheet updates | |
| 2 | admin | Tue Apr 0... | Tue Apr 0... | Default calculation | Default Calc... |
| 1 | admin | Tue Apr 0... | Tue Apr 0... | Spread sheet updates | |
| 0 | admin | Tue Apr 0... | Tue Apr 0... | Spread sheet updates | |

トランザクションのリストをソートできますが、トランザクションの再実行は、シーケンス ID と同じ順序で行う必要があります。

query database MaxL ステートメントを **list transactions** 文法で使用するにより、リストの出力を MaxL シェル・ウィンドウに表示する(デフォルト)か、指定したファイルに書き込むかを指定できます。ステートメントの構文:

```
query database appname.dbname list transactions [after TIME [[force]
write to file FILE-NAME]]];
```

たとえば、次のステートメントでは、前回の再実行要求が実行された後、または最後にバックアップが復元された時間より後(後で発生した方)にロギングされた Sample.Basic データベースのトランザクションが MaxL シェル・ウィンドウに表示されます:

```
query database Sample.Basic list transactions;
```

ファイルへの出力は、ログ情報を他のツールで処理する場合に便利です。たとえば、ファイルのコンテンツをリレーショナル・データベースにインポートし、ツールを使用して、情報を分析できます。

write to file 文法を使用すると、リストの出力は、Essbase サーバー・コンピュータ上のカンマ区切りファイルに書き込まれます。Essbase サーバー上の既存のディレクトリへの完全パスと、出力ファイル名を指定します。出力ファイル名のみが指定されている場合は、Essbase はファイルを ARBORPATH/app に書き込みます。

既存の出力ファイルに書き込む場合は、**force** 文法を使用して、ファイルを上書きします。

たとえば、次のステートメントでは、2009 年 11 月 20 日の 12:20:00 以降にロギングされた Sample.Basic データベースのトランザクションが、Sample.Basic データベース・ディレクトリ内の CSV ファイルに書き込まれます:

```
query database Sample.Basic list transactions after '11_20_2009:12:20:00' write to file EPM_ORACLE_HOME/products/Essbase/EssbaseServer/app/Sample/Basic/listoutput.csv';
```

ロギングされたトランザクションの再実行のユーザー・セキュリティの構成

ロギングされたトランザクションを再実行する際、デフォルトでは、Essbase は、最初にトランザクションを実行したユーザーのセキュリティ設定を使用します。そのユーザーが存在しなくなっていたり、そのユーザーのユーザー名が変更されていた場合は、再実行操作は失敗します。明示的に行う場合、または元のユーザーの設定を使用できない場合に、再実行操作を行う管理者のセキュリティ設定を使用するには、essbase.cfg 内の `REPLAYSECURITYOPTION n` 構成設定を使用します。n の値と指定されるセキュリティ設定は次のとおりです:

- 1 - (デフォルト) トランザクションを最初に実行したユーザー
- 2 - 再実行操作を行う管理者
- 3 - トランザクションを最初に実行したユーザー

そのユーザーが存在しないか、そのユーザーのユーザー名が変更されている場合は、再実行操作を行う管理者のセキュリティ設定が使用されます。

ロギングされたトランザクションの再実行

管理者のみがトランザクションを再実行できます。次の条件に基づいて、ロギングされたトランザクションを再実行できます:

- 指定された時間の後にロギングされたトランザクション
- 前回の再実行要求が実行された後、または最後にバックアップが復元された時間より後(後に発生した方)にロギングされたトランザクション

- シーケンス ID の範囲に基づいて選択されるトランザクション

ロギングされる各トランザクションには、トランザクションが実行された順序を示すシーケンス ID が割り当てられます。再実行後に復元されたデータの整合性を確保するために、Essbase は、トランザクションが実行された順序でトランザクションを再実行します。たとえば、計算の前にデータ・ロードが行われていた場合、データ・ロードの前に計算を再実行すると、正しい結果が生成されません。したがって、このような場合はデータ・ロード・トランザクションを再実行してから計算トランザクションを再実行する必要があります。

シーケンス ID の順序は、複数の再実行コマンドをまたいで追跡されます。あるトランザクションが再実行されると、それ以降は、それより大きいシーケンス ID のトランザクションしか再実行できません。たとえば、シーケンス ID が 1、2、3 のトランザクションを再実行した後は、シーケンス ID が 4 以上のトランザクションのみ再実行できます。

復元操作の後で実行およびロギングされたトランザクションは、シーケンス ID を使用して再実行しないかぎり、再実行されません。データベースを復元した後、バックアップ後から復元前までにロギングされた、データベースを完全に回復するのに必要なトランザクションを再実行することをお勧めします。これで、新しいトランザクションを実行できるようになります。

注： そのトランザクション結果がデータベースの回復に必要なと確信できるトランザクションについては再実行を省略できます。たとえば、まったく同じデータを 2 回ロードしている場合、そのデータ・ロードは 1 回再実行するだけで済みます。

▶ ロギングされたトランザクションを再実行するには、次のツールを使用します:

| ツール | トピック | 場所 |
|-------------------------|---|--|
| Administration Services | ブロック・ストレージ・データベースのロギングされたトランザクションの再実行に関する説明 | 『Oracle Essbase Administration Services オンライン・ヘルプ』 |
| MaxL | alter database | Oracle Essbase Technical Reference |

再実行機能は、管理サービス・コンソールを使用した場合でも MaxL を使用した場合でも同じです。

再実行するトランザクションを選択するには、シーケンス ID の範囲をカンマ区切り文字列で入力します。範囲は、1 つ以上のトランザクションで構成されます:

- トランザクションが 1 つの場合: n to n。たとえば、1 to 1
- トランザクションが複数の場合: x to y。たとえば、20 to 100

管理サービス・コンソールでは、「トランザクションの再実行」コマンドを使用します。

MaxL では、**alter database** ステートメントを **replay transactions** 文法で使用します。
構文:

```
alter database appname.dbname replay transactions [after TIME]
[using sequence_id_range COMMA-SEPARATED_RANGE];
```

たとえば、次のステートメントでは、Sample.Basic データベース内のシーケンス ID 1 から 10、および 20 から 100 のトランザクションが再実行されます:

```
alter database Sample.Basic replay transactions using
sequence_id_range 1 to 10,20 to 100;
```

トランザクション・ログ・ストアとアーカイブされている再実行データ・ファイルの除去

定期的に、トランザクション・ログ・ストアと、Replay ディレクトリ内のファイルを除去して、Essbase サーバー上の使用可能なディスク・スペースを増やす必要があります。

トランザクション・ログ・ストア:1つのデータベースのトランザクション・ログ・ストアはまとめて除去することをお勧めします。ログ・ストアは、TRANSACTIONLOGLOCATION 構成設定で指定したログの場所の下にあるサブディレクトリにあります。たとえば、Sample.Basic データベースのログの場所が /Oracle/trlog である場合は、/Oracle/trlog/Sample/Basic のコンテンツを削除します

[32 ページの「トランザクション・ロギングを使用可能にする」](#)を参照してください。

Replay ディレクトリ:トランザクションを再実行した後、再実行したトランザクションに関連付けられているデータ・ファイルとルール・ファイルを、ARBORPATH/app/appname/dbname/Replay ディレクトリから除去できます([34 ページの「トランザクションの再実行の構成」](#)を参照)。Replay ディレクトリ内のすべてのファイルを削除するか、次のガイドラインに従って、除去するファイルを選択できます:

- 古いファイルから順にデータ・ファイルとルール・ファイルを除去します。
- 一番新しいアーカイブ・ファイルより後のタイムスタンプのデータ・ファイルとルール・ファイルは除去しないでください。

注: トランザクション・ロギングと再実行に関連付けられているファイルは、データベースのバックアップを何度か行った後に削除することをお勧めします。

パーティション・データベースを使用したトランザクション・ロギングと再実行

パーティション・データベースからトランザクションのロギングと再実行を行う場合は、次のガイドラインに従います:

- パーティション・コマンド(たとえば、同期化コマンド)はロギングされないもので、再実行できません。データベースを回復するときは、ロギングされているトランザクションを再実行してから、同じパーティションの変更を古いものから順に手動で行う必要があります。

- パーティション・データベースを使用していたり、計算スクリプトで@XREF関数を使用している場合は、ソース・データベースとターゲット・データベース間で、古いものから順に、ロギングされているトランザクションを正しく選択して、再実行する必要があります。

注： ソース・データベースとターゲット・データベースを同時にバックアップおよび復元します。31 ページの「パーティション・データベースのバックアップと復元」を参照してください。

手動によるバックアップと復元

手動操作によるバックアップとリカバリの戦略をすでに設計している場合は、引き続きそれを使用できます。ただし、バックアップと復元(23 ページの「ブロック・ストレージ・データベースに対するバックアップと復元の使用方法」を参照)と、トランザクション・ロギングと再実行(31 ページの「ブロック・ストレージ・データベースに対するトランザクション・ロギングと再実行の使用法」を参照)を、できるだけ既存のバックアップとリカバリの戦略に組み込むことをお勧めします。

手動によるブロック・ストレージ・データベースのバックアップと復元については、次のトピックを参照してください:

- 39 ページの「データベース・ファイルのバックアップと復元」
- 40 ページの「実行中のファイルのバックアップ」
- 42 ページの「データのバックアップおよび復元」

データベース・ファイルのバックアップと復元

表 7 に示されているサーバー、アプリケーションおよびデータベースの各ファイルは定期的にバックアップしてください。通常、ファイルのバックアップは、Essbase アプリケーションとデータベース、およびエージェントがシャット・ダウンされてから実行する必要があります。

表 7 バックアップする Essbase ファイル

| ファイル | 説明 | 場所 |
|-----------------------------|---|---|
| ess xxxxx .ind ¹ | Essbase インデックス・ファイル | ARBORPATH / app / appname / dbname / |
| ess xxxxx .pag ² | Essbase データ・ファイル | ARBORPATH / app / appname / dbname / |
| dbname .esm | データベース・リカバリに使用する制御情報が含まれる Essbase カーネル・ファイル | ARBORPATH / app / appname / dbname / |
| dbname .tct | トランザクション制御テーブル | ARBORPATH / app / appname / dbname / |
| dbname .ind | データおよびインデックスのフリー・フラグメント用のフリー・フラグメント・ファイル | ARBORPATH / app / appname / dbname / |

| ファイル | 説明 | 場所 |
|--|---|---------------------------------------|
| dbname .otl | アウトライン・ファイル。データベースのすべてのメタデータを保管し、データの保管方法を定義するが、データそのものは保管しない | ARBORPATH /app/ appname / dbname / |
| dbname .app | アプリケーション設定を含むアプリケーション・ファイル | ARBORPATH /app/ |
| dbname .db | データベース設定を含むデータベース・ファイル | ARBORPATH /app/ appname / dbname / |
| x .lro | リンクされたレポート・オブジェクト | ARBORPATH /app/ appname / dbname / |
| essbase.sec ³ | Essbase セキュリティ・ファイル | ARBORPATH /bin/ |
| essbase_timestamp .bak | Essbase セキュリティ・ファイルのバックアップ | ARBORPATH /bin/ |
| essbase.cfg | Essbase サーバー構成ファイル | ARBORPATH /bin/ |
| .otl .csc .rul .rep .eqd .sel | データベース・アーティファクト・ファイル | ARBORPATH /app/ appname / dbname / |
| ESSCMD または MaxL スクリプト | | 指定されている格納場所はありません。 |

¹ データベースには複数の .ind ファイルが含まれている場合があるので、データベースに関連する .ind ファイルをすべてバックアップします。

² データベースには複数の .pag ファイルが含まれている場合があるので、データベースに関連する .pag ファイルをすべてバックアップします。

³ essbase.sec をバックアップする前にエージェントをシャット・ダウンしてください。

ファイル・システムのバックアップを実行する場合は、任意のファイル・システムのバックアップ・ソフトウェアを使用します。特定のディレクトリまたはファイル、あるいは Essbase ディレクトリ構造全体をバックアップできます。すべてのディスク・ボリューム上のデータをバックアップします。

データベースを復元するには、アプリケーションが停止していることを確認し、ディスク上のファイルを、対応するバックアップ・ファイルで置き換えます。

実行中のファイルのバックアップ

バックアップ中に、Essbase データベースを実行する必要がある場合は、次の手順に従います:

1. [41 ページの「データベースの読取り専用モードへの設定」](#)
2. [41 ページの「ファイル・バックアップの実行」](#)
3. [41 ページの「データベースの読取り書込みモードへの復帰」](#)

4. 42 ページの「ファイル・バックアップの復元」

データベースの読取り専用モードへの設定

データベースを読取り専用(アーカイブ)モードに設定すると、バックアップ中はデータベースの更新は行われなくなります。

▶ データベースを読取り専用モードに設定するには、次のツールを使用します:

| ツール | トピック | 場所 |
|--------|-------------------------------------|------------------------------------|
| MaxL | alter database begin archive | Oracle Essbase Technical Reference |
| ESSCMD | BEGINARCHIVE | Oracle Essbase Technical Reference |

バックアップ実行後、データベースを読取り書込みモードに戻します。

BEGINARCHIVE コマンドにより、次のタスクが実行されます:

- 変更されたすべてのデータがディスクにコミットされます。
- データベースが読取り専用モードに切り替えられます。
- データベース・ファイルが共有の読取り専用モードで再度開きます。
- ARBORPATH/app/appname/dbname ディレクトリに、バックアップするファイルのリストが含まれるファイル(デフォルト名は archive.lst)が作成されます。

バックアップ・プロセス中にデータを変更しようとする、データが読取り専用モードであることを示すエラー・メッセージが表示されます。

begin archive は、バックアップを実行しません。バックアップ中にデータベースを保護するだけです。BEGINARCHIVE ESSCMD コマンドまたは alter database begin archive MaxL ステートメントを取り消したときに can't cancel メッセージが表示された場合、アイテムをドライブに書き込んでいる最終段階である可能性があります。ここで、操作の取消しはできません。

注意 BEGINARCHIVE を使用しないでデータをバックアップする場合は、データベースが破損しないように、バックアップ中、すべての Essbase アプリケーションが閉じられ、ユーザー全員がログオフしていることを確認してください。

ファイル・バックアップの実行

バックアップを実行する前に、データベースを読取り専用モードに設定します。

▶ データをバックアップするには、サードパーティのバックアップ・ユーティリティを使用して、archive.lst 内および表 7 内にあげられているファイルをバックアップするか、Essbase ディレクトリ構造全体をバックアップします。

データベースの読取り書込みモードへの復帰

バックアップ実行後、データベースを読取り書込みモードに戻します。

▶ データベースを読取り書込みモードに戻すには、次のツールを使用します:

| ツール | トピック | 場所 |
|--------|-----------------------------------|------------------------------------|
| MaxL | alter database end archive | Oracle Essbase Technical Reference |
| ESSCMD | ENDARCHIVE | Oracle Essbase Technical Reference |

アーカイブ終了ユーティリティによって、次のタスクが実行されます:

- データベースが読取り書込みモードに戻ります。
- 排他的な読取り書込みモードでデータベース・ファイルが再度開きます。

注: データベースをシャット・ダウンして再起動する場合でも、アーカイブ終了ユーティリティを使用して、データベースを読取り書込みモードに戻す必要があります。アーカイブ終了ユーティリティは、データベースを再起動しません。

ファイル・バックアップの復元

データベースを復元するには、ディスク上にあるファイルを、バックアップの対応するファイルで置き換えます。

エクスポート・ファイルから復元している場合を除き、アプリケーションを停止する必要があります。この場合、アプリケーションがクライアントの接続を拒否していることを確認します。

データのバックアップおよび復元

データのエクスポートでは、データが、指定したファイルにコピーされます。

データをテキスト・ファイルにエクスポートした場合、データは圧縮されません。テキスト・エクスポート・ファイルにはデータのみが含まれます。制御情報、アウトライン、セキュリティ情報は含まれません。

次のタスクを実行する場合は、データのエクスポートを検討してください:

- プラットフォーム間でデータを転送する場合
- データの一部(たとえば、レベル-0 ブロック)のみバックアップする場合
- エクスポート・ファイルを、バイナリ・フォーマットではなくテキスト・フォーマットで作成する場合

データのエクスポートの長所:

- テキスト・エクスポート・ファイルを使用して、ソース・データベースから別のプラットフォームのデータベースにデータをロードできます。データベースを列フォーマットでエクスポートすることにより、エクスポート・ファイルを操作し、ルール・ファイルとともに使用して、データをリロードしたり、別のデータベースにロードしたりできます。

データベース・アウトラインにエクスポート・ファイル内のすべてのメンバーが含まれていない場合、エクスポート・ファイルのデータベースへのロードは失敗します。

エクスポート・ファイルを作成してからリロードするまでの間にアウトラインが変更されている場合(かつ、エクスポート・ファイル内のすべてのメンバーが新しいアウトラインに含まれている場合)、同じアウトラインの場合よりも、ロード時間が大幅に延びる可能性があります。

- すべてのブロックについて、対応するページ・ファイルとインデックス・ファイルが一致しているかどうかを確認されます。つまり、データの整合性が確認されます。
- データをエクスポートし、データベースからすべてのデータを消去し、テキスト・ファイルをリロードすると、断片化を軽減できます。

データのエクスポートの短所:

- エクスポート実行時に動的計算が実行されないかぎり、エクスポートに含まれるのは、保管されたデータと、すでに計算済の動的計算および保管メンバーのデータのみです。
- データベースのエクスポート中、ユーザーはデータベースへの書込みができなくなります。エクスポートの開始後、読取り操作は実行できます。大きなデータベースをエクスポートする場合は非常に時間がかかり、その間、ユーザーはデータの読取りしかできません。

注: レポートまたは計算スクリプトを作成することによって、データのサブセットをエクスポートできます。計算スクリプトを使用した場合、データをテキスト・ファイルまたはバイナリ・ファイル、あるいはリレーショナル・データベースに直接エクスポートできます。Oracle Essbase Database Administrator's Guide を参照してください。

データのエクスポート

どのデータのエクスポート方法の場合でも必要な基本情報は同じです:

- エクスポート・データ・ファイルの名前
- エクスポートするデータの量
 - すべてのデータ
 - レベル-0 のブロックのみ(レベル-0 の疎メンバーの組合せのみが保持されるブロック。これらのブロックには、上位レベルの密次元メンバーのデータが含まれます)
 - 入力ブロックのデータのみ(以前のデータ・ロードまたはスプレッドシートの「ロックして送信」によって入力されたデータを含むブロック)
- データを列フォーマットでエクスポートするかどうか

列フォーマットでは、各行にすべての次元のメンバー名が表示されます。名前は、行ごとに繰り返されます。

列フォーマットでは、エクスポート・データが構造化されるので、エクスポート・データを、Essbase ツール以外のアプリケーション、たとえばリレーショナル・データベースなどで処理しやすくなります。列フォーマットではない場合、データ・ブロックを識別する疎メンバーは、ブロックにつき 1 回のみ含まれます。列フォーマットでないエクスポート・ファイルは列フォーマット

トのエキスポート・ファイルより小さいため、ファイルのリロードが高速になります。

▶ データをエキスポートするには、次のツールを使用します:

| ツール | トピック | 場所 |
|-------------------------|---|--|
| Administration Services | データベースのエキスポート | 『Oracle Essbase Administration Services オンライン・ヘルプ』 |
| MaxL | export data | Oracle Essbase Technical Reference |
| ESSCMD | EXPORT または PAREXPORT | Oracle Essbase Technical Reference |
| レポート・ライター | レポート・ライター・スクリプトを使用して、選択したデータをエキスポートします。 | Oracle Essbase Database Administrator's Guide |
| 計算スクリプト(ブロック・ストレージのみ) | DATAEXPORT 計算コマンド | Oracle Essbase Technical Reference |

注: エクスポートのパフォーマンスを向上するには、指定した複数のファイルに対して並列にデータをエキスポートします。

2GB を超えるファイルのエキスポート

ファイル・システムによっては、2GB を超えるテキスト・ファイルをサポートしない場合があります。どの OS 上においても Essbase により、エキスポート・ファイルが 2GB を超えると判断される場合、必要に応じて、2 つ以上のエキスポート・ファイルが作成されます。メイン・ファイルには、リクエストしたファイル名が使用されます。追加ファイル名には、アンダースコアと連続した数字が付きます。たとえば、指定したファイル名が `expJan.txt` であり、エキスポート・データが 4GB を超える場合、Essbase は `expJan.txt`、`expJan_1.txt` および `expJan_2.txt` という名前の 3 つのファイルを作成します。エキスポート・データ・ファイルのリロードはどの順序でもかまいません。

データのバックアップの復元

エキスポートしたデータをリロードすると、これらのデータは入力データとしてマークされます。レベル-0 ブロックまたは入力ブロックからエキスポートしたデータをリロードする場合は、リロード後にデータベースを再計算する必要があります。Essbase がデータベースを再計算する場合、すべてのデータ・ブロックが再計算されます。

データベース内のすべてのデータをエキスポートして、リロードする場合、Essbase は、データベース内のすべてのブロックを入力ブロックとしてマークします。その結果、データベースに非入力ブロックが存在しないため、データは消去できません。

エキスポートしたデータをリロードすると、Essbase は、データ・ブロックをダーティとしてもマークします。エキスポート前にデータベースに対して計算を実行していた場合は、次の計算時に時間を短縮するため、ブロックのステータスをクリーンに設定します。エキスポート前にデータベースに対して計算を実行していない場合は、ブロックのステータスをクリーンに設定する必要はありません。

- ▶ エクスポート・データをリロードするには、次のツールを使用します:

| ツール | トピック | 場所 |
|-------------------------|-----------------------------------|--|
| Administration Services | データ・ロードまたは次元構築の実行 | 『Oracle Essbase Administration Services オンライン・ヘルプ』 |
| MaxL | import data | Oracle Essbase Technical Reference |
| ESSCMD | IMPORT | Oracle Essbase Technical Reference |
| 計算スクリプト | DATAIMPORTBIN(エクスポート・バイナリ・ファイルのみ) | Oracle Essbase Technical Reference |

- ▶ すべてのデータをエクスポートしてリロードした後に、データベース内のブロック・ステータスをクリーンにするには、次の計算スクリプトを実行します:

```
Set ClearUpdateStatus Only;
```

```
Calc All;
```

LRO リンクの保守

LRO (リンク・レポート・オブジェクト)は、バックアップしたデータベースから復元できません。したがって、エクスポートして、インポートする必要があります。

データベースのバックアップ手順の一部として、LRO をエクスポートします。

- ▶ LRO リンクをエクスポートするには、次のツールを使用します:

| ツール | トピック | 場所 |
|-------------------------|-------------------|--|
| Administration Services | LRO のエクスポート | 『Oracle Essbase Administration Services オンライン・ヘルプ』 |
| MaxL | export lro | Oracle Essbase Technical Reference |

データベース復元手順の一部として、エクスポートされた LRO をインポートします。

- ▶ LRO リンクをインポートするには、次のツールを使用します:

| ツール | トピック | 場所 |
|--|-------------------|--|
| Oracle Essbase Administration Services | LRO のインポート | 『Oracle Essbase Administration Services オンライン・ヘルプ』 |
| MaxL | import lro | Oracle Essbase Technical Reference |

破損したデータベース・ファイルの解決

データベース・ファイルが破損している場合、データベースは Essbase サーバー上で開始されません。

▶ 破損データベースを復元するには:

1 次のファイルを削除します:

- `ess xxxxxx .pag`
- `dbname .esm`
- `ess xxxxxx .ind`
- `dbname .tct`
- `dbname .ind`

2 データベースを再起動します。

3 破損前に作成したデータまたはエクスポート・ファイルをリロードします。

環境変数値の保持

ARBORPATH 環境変数と ESSLANG 環境変数の値を控えておきます。

集約ストレージ・アプリケーションのバックアップと復元

表 8 に示されているファイル構造は、集約ストレージ・アプリケーション特有のファイル構造です。

表 8 集約ストレージ・アプリケーション・ファイル

| ディレクトリまたはファイル | 説明 | 場所 |
|---------------------------|----------------------------|---------------------------------------|
| <code>appname</code> | アプリケーション・ディレクトリ | ARBORPATH /app/ appname |
| <code>appname .app</code> | アプリケーション設定を含むアプリケーション・ファイル | ARBORPATH /app/ appname / |
| <code>appname .log</code> | アプリケーション・ログ・ファイル | ARBORPATH /app/ appname / |
| <code>dbname</code> | データベース・ディレクトリ | ARBORPATH /app/ appname / dbname |
| <code>dbname .db</code> | データベース設定を含むデータベース・ファイル | ARBORPATH /app/ appname / dbname / |
| <code>dbname .dbb</code> | データベース・ファイルのバックアップ | ARBORPATH /app/ appname / dbname / |
| <code>dbname .ddb</code> | パーティション定義ファイル | ARBORPATH /app/ appname / dbname / |

| ディレクトリまたはファイル | 説明 | 場所 |
|-----------------|--|--|
| dbname.otl | アウトライン・ファイル | ARBORPATH /app/ appname / dbname / |
| dbname.otl.keep | dbname.otl の一時バックアップ(アウトラインを変更し、これを新しいファイルに書き込む操作により作成される) | ARBORPATH /app/ appname / dbname / |
| trigger.trg | トリガー・ファイル | ARBORPATH /app/ appname / dbname / |
| default | テーブルスペース・ディレクトリ(複数の場所に定義可能) | (デフォルトの場所)ARBORPATH/ app/appname/default |
| temp | テーブルスペース・ディレクトリ(複数の場所に定義可能) | (デフォルトの場所)ARBORPATH/ app/appname/temp |
| log | テーブルスペース・ディレクトリ | ARBORPATH /app/ appname /log |
| metadata | テーブルスペース・ディレクトリ | ARBORPATH /app/ appname / metadata |
| ess n .dat | ストレージ・データ・ファイルを集約します。 | ARBORPATH /app/ appname / default/ ARBORPATH /app/ appname / log/ ARBORPATH /app/ appname / metadata/ |

▶ 集約ストレージ・データベースをバックアップするには:

- 1 アプリケーションを停止します。
- 2 ファイル・システムを使用して、temp ディレクトリを除くアプリケーション・ディレクトリ(ARBORPATH/app/appname)のコンテンツをコピーします。

パーティション定義のエクスポートとインポート

この項は、ブロック・ストレージ・データベースと集約ストレージ・データベースに適用されます。

パーティション・データベースに対してデータベース・マネージャの権限を持っている場合は、パーティション定義をエクスポートすることによって、このバックアップ・コピーを作成できます。パーティション定義は.xml ファイルとして、ファイル・システムまたはネットワークに最初に保存する必要があります。 .xml 拡張子の付いたパーティション定義ファイルのみインポートできます。

パーティション定義をエクスポートおよびインポートする手順については、『Oracle Essbase Administration Services オンライン・ヘルプ』のパーティション定義のエクスポートとインポートに関する項を参照してください。

Integration Services

▶ Integration Services をバックアップするには:

- 1 Oracle Essbase Integration Services カタログ・リポジトリの完全バックアップを実行します。
- 2 オプション: すべてのモデルとメタアウトラインを XML ファイルにエクスポートします。
- 3 設定されていたすべてのソース ODBC データ・ソース名(DSN)のリストを作成および保存します。
- 4 インストール済ソフトウェアの現在のコピーを、ais.cfg などのすべてのプロパティ・ファイルとともに保管します。

▶ Integration Services を回復するには:

- ハードウェアの障害で Integration Services インストール・ファイルが失われた場合は、Integration Services を再インストールする必要があります。
- カタログが含まれるデータベースが破損した場合は、これを復元し、そのカタログに ODBC DSN を作成し、これを使用してモデルとメタアウトラインを取得します。
- バックアップ・カタログ・データベースも破損した場合は、Oracle Essbase Integration Services コンソールから、空のカタログを作成し、XML ファイルを使用して各モデルとメタアウトラインをインポートします。

Essbase Studio

▶ Essbase Studio コンポーネントをバックアップして、前の状態に復元するには:

- 1 Oracle Essbase Studio サーバーを停止します。
- 2 Oracle Essbase Studio メタデータ・リポジトリの完全バックアップを実行します。
- 3 インストール済ソフトウェアとすべてのプロパティ・ファイル (server.properties、essbase.properties および eas.properties)の現在のコピーを保持します。

Provider Services

次のファイルとフォルダをバックアップします:

- EPM_ORACLE_HOME/products/Essbase/aps/bin/datasources.xml ファイル - 様々なプロバイダのすべてのデータ・ソース接続情報が含まれます。
- EPM_ORACLE_HOME/products/Essbase/aps/data フォルダ - Oracle Hyperion Provider Services によって一元管理されているすべてのスマート・スライス定義が含まれています。

サブ・フォルダを含むフォルダ全体をバックアップします。

- EPM_ORACLE_INSTANCE /products/Essbase/aps/bin/Essbase.properties

第2章「共通バックアップ・タスク」を参照してください。

バックアップされたファイルとフォルダは、元の場所に戻すことによって復元できます。

5

Financial Performance Managementアプリケーション

この章の内容

| | |
|---|----|
| Planning | 51 |
| Disclosure Management | 52 |
| Financial Close Management | 53 |
| Financial Management | 53 |
| Performance Scorecard | 54 |
| Profitability and Cost Management | 55 |
| Strategic Finance | 56 |

Planning

▶ 障害からの Planning の回復を使用可能にするには:

- 1 第2章「共通バックアップ・タスク」を参照して、関連コンポーネントをバックアップします。

注: Planning システム・データベースおよび個々のアプリケーション・データベースのすべてを必ずバックアップします。

アプリケーションおよび関連アプリケーション・データベースのバックアップには次のアイテムが含まれている必要があります:

- Essbase に含まれるアプリケーション
- Planning および Oracle Hyperion Financial Reporting 用のリレーショナル・データベース
- 必要な Planning コンポーネント

ヒント: Windows レジストリ全体をバックアップするのではなく、Planning の、HKLM/Software/Oracle* nodes キーと HKLM/System/CurrentControlSet/Services/Oracle*キーのみをバックアップできます。

- 2 アプリケーションの Essbase アウトライン・ファイルをバックアップします。
- 3 Essbase データの完全エクスポートをバックアップします。21 ページの「Essbase」を参照してください。

- 4 Essbase に関連付けられている計算スクリプトと代替変数をバックアップします。
 - 5 Planning 共有ライブラリが含まれるファイル・システム・フォルダをバックアップします:
 - 32 ビット: EPM_ORACLE_HOME/products/Planning/lib
 - 64 ビット: EPM_ORACLE_HOME/products/Planning/lib64
 - 6 UNIX: Planning に関連付けられている起動ファイルなど、カスタム・スクリプトをバックアップします。
 - 7 EPM_ORACLE_HOME/common/planning/11.1.2.0/lib 内の共通コンポーネントをバックアップします。
 - 8 EPM_ORACLE_HOME/products/Planning ディレクトリのバックアップに次のファイルが含まれていることを確認し、含まれていない場合は手動でこれらをバックアップします:
 - log4j.properties
 - essbase.properties
- ▶ 障害後に回復するには:
- 1 すべての製品と関連サービスを停止します。Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。
 - 2 バックアップされたファイルとディレクトリを元の場所に配置します。
 - 3 Oracle Hyperion Planning データベースを復元します。
 - 4 すべてのサーバーとサービスを再起動します。

第 4 章「Essbase コンポーネント」も参照してください。

Disclosure Management

Disclosure Management マッピング・データのリカバリを有効にするには、(タクソノミおよびドキュメントを含む)ファイル・システムと(XBRL マッピングおよび Disclosure Management データを含む)リレーショナル・データベースの両方をバックアップします。Disclosure Management サーバー・ファイル・システムのタクソノミもバックアップする必要があります。タクソノミ・ファイルは、EPM_ORACLE_HOME/products/DisclosureManagement/DiscManInstance/xbrlfiles 内にあります。

- Oracle Hyperion Smart View for Office を使用している場合は、レポートおよび XBRL マッピングに使用する Microsoft Office ドキュメントをバックアップします。
- Disclosure Management が Financial Reporting と統合されている場合は、レポートおよびその他の Financial Reporting アーティファクトもバックアップします。

Oracle Hyperion Disclosure Management をバックアップから復元するには、バックアップされた分類を元の場所に復元する必要があります。マッピングしたレポー

トは、元のファイル・システムの場所にあるこれらの分類を参照しているためです。

Financial Close Management

Financial Close Management データのリカバリを有効にするには、データベースと SOA サーバーをバックアップします。ホット・バックアップまたはコールド・バックアップを実行できます。7 ページの「データベースのバックアップ・タイプ」および RDBMS のドキュメントを参照してください。SOA サーバーをバックアップする手順は、『Oracle Fusion Middleware 管理者ガイド』の次の章を参照してください:

- 第 15 章「バックアップとリカバリの概要」
- 第 16 章「環境のバックアップ」
- 第 17 章「環境のリカバリ」

Financial Management

ほとんどの Financial Management 構成情報は、Shared Services レジストリに格納されていますが、一部は Windows レジストリの HKEY_LOCAL_MACHINE/SOFTWARE/Oracle Solutions/Hyperion Financial Management 内に格納されています。分散コンポーネント・オブジェクト・モデル(DCOM)セキュリティ情報は HFMServer.exe と HsvDataSource.exe に関連付けられています。この情報をバックアップおよび復元することは難しいので、すべてのアプリケーション・サーバーと Web サーバー上で次の手順を実行して、Financial Management をバックアップします。

► Financial Management の回復を使用可能にするには:

1 1 サイクルに 1 回、完全データベース・バックアップを実行します:

1. Financial Management Web サービスと IIS を停止します。
2. 次の関連サービスを停止します:
 - HsxService.exe
 - DMEListener.exe
 - HFMWebServiceManager.exe
3. 次の関連プロセスを停止します:
 - HsxServer.exe
 - HsvDatasource.exe
 - CASSecurity.exe

2 HKEY_LOCAL_MACHINE/SOFTWARE/Oracle Solutions/Hyperion Financial Management の Windows レジストリのエクスポートをバックアップします。

3 Shared Services レジストリをバックアップします。

4 カスタマイズされたスタイル・シートをバックアップします。

注： Oracle Hyperion Shared Services もバックアップする必要があります。また、関連コンテンツのために Reporting and Analysis をバックアップすることが必要になる場合があります。

▶ アプリケーション・サーバーまたは Web サーバーの障害から回復するには:

- 1 障害が発生したアプリケーション・サーバーまたは Web サーバー上で Financial Management を再インストールして構成します。
- 2 新しく構成したサーバー上で Financial Management のすべてのプロセスおよびサービスを停止します。
- 3 バックアップされたファイルを元の場所に復元します。
- 4 サービスを再起動します。

▶ データベース・サーバーの障害から回復するには:

- 1 すべてのアプリケーション・サーバーと Web サーバー上で Financial Management のすべてのプロセスおよびサービスを停止します。
- 2 前回の完全バックアップからデータベースを復元し、必要に応じてトランザクション・ログを適用します。

Oracle Hyperion Financial Management データベースを、データベースが作成され、アプリケーション・サーバー名が変更されたマシン以外のマシンに復元する場合は、データベースから次のテーブルを削除する必要があります:

- HSX_Cluster_Cont_info
- HSX_Cluster_Controllers
- HSX_Cluster_Info
- HSX_Cluster_Servers

テーブルを削除する場合、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System コンフィグレータに戻って、クラスタ定義を再作成する必要があります。

- 3 データベースを再起動します。
- 4 アプリケーション・サーバーと Web サーバーを再起動します。

Performance Scorecard

▶ 障害からの回復を使用可能にするには:

- 1 次のアイテムを定期的にバックアップします:
 - 関連コンポーネント(第2章「共通バックアップ・タスク」を参照)

- 添付ファイルが含まれているディレクトリ(デフォルトでは EPM_ORACLE_INSTANCE/HPS/hpsfiles/attachments)
 - ノートが含まれているディレクトリ(デフォルトでは EPM_ORACLE_INSTANCE/HPS/hpsfiles/notes)
 - EPM_ORACLE_INSTANCE/HPS/hpsfiles/config にある HPSConfig.properties および AlerterConfig.properties
- 2 アプリケーション・データの Essbase データベースを生成した場合は、[第 4 章「Essbase コンポーネント」](#) で説明されている手順に従って、データベースをバックアップします。
 - 3 ETL インポート・エクスポート・ユーティリティをインストールした場合は、次のディレクトリをバックアップします:
 - EPM_ORACLE_INSTANCE /HPS/hpsfiles/tools/config
 - EPM_ORACLE_INSTANCE /HPS/hpsfiles/tools/bin
- ▶ 障害から回復するには、コピーされたディレクトリとファイルを元の場所に戻し、データベースを復元します。

Profitability and Cost Management

- ▶ 障害からの Profitability and Cost Management の回復を使用可能にするには:
- 1 [第 2 章「共通バックアップ・タスク」](#) を参照して、関連コンポーネントをバックアップします。
- 注：** Profitability and Cost Management を Oracle Hyperion Financial Reporting または Oracle Hyperion Web Analysis とともに使用している場合は、それらの製品もバックアップする必要があります。
- 2 Oracle Hyperion Profitability and Cost Management のインポート・ステージング領域と運用データ・ストアをバックアップします。
リレーショナル・データベースのバックアップ・ツールを使用します。スクリプトやスケジューラ・スクリプトなどを使用します。
 - 3 Oracle Essbase アプリケーション、データベース、計算スクリプトおよびデータ・フィルタをバックアップします。
[第 4 章「Essbase コンポーネント」](#) および Oracle Essbase Database Administrator's Guide を参照してください。

- ▶ 障害から回復するには、バックアップされたコンポーネントを元の場所に復元し、データベースを復元します。

Strategic Finance

- ▶ 障害からの Strategic Finance の回復を使用可能にするには:
 - [第2章「共通バックアップ・タスク」](#)を参照して、関連コンポーネントをバックアップします。
 - オプションの RDBMS 接続情報を記録します。
 - アプリケーション・データ・フォルダ(デフォルトでは EPM_ORACLE_HOME/products/hsf/hsfdata)をバックアップします。
 - .coa ファイルなどのカスタム・ファイル、currdata.dat、consdata.dat および convert.idx を別の場所またはストレージ・デバイスにコピーします。
 - カスタム・テンプレートを使用している場合は、.coa、.idx、.dat、.txt、.xml、.drs、.alt、.alc のファイルなど、サーバー・プログラム・ディレクトリのコンテンツをバックアップします。
 - Strategic Finance サーバーで Windows レジストリ設定をバックアップします。[14 ページの「Windows レジストリ設定のバックアップ」](#)を参照してください。

注： アプリケーション・データ・フォルダをバックアップしているときに Strategic Finance でファイルが開いたままになっていた場合に備えて、標準的なバックアップ製品で、開いているファイルをバックアップするオプションを使用することをお勧めします。開いているファイルがバックアップされない場合、正確なバックアップ・イメージの一貫性を確保できないことがあります。

- ▶ 障害から Strategic Finance を回復するには:
 - 1 Oracle Hyperion Strategic Finance Server を再インストールします。
 - 2 バックアップ・ファイルを新しいインストール・ディレクトリにコピーします。
 - 3 バックアップしたその他のコンポーネントを復元します。
 - 4 Oracle Hyperion Strategic Finance から RDBMS へのデータ・エクスポート用の接続を再確立します。
 - 5 Oracle Hyperion Strategic Finance Server を再起動します。

6

Reporting and Analysis

この章の内容

| | |
|--|----|
| Reporting and Analysis ファイル・システムのバックアップ..... | 57 |
| Reporting and Analysis サービスの一時停止..... | 58 |
| Reporting and Analysis の復元..... | 59 |
| Dashboard Development Services | 59 |
| Financial Reporting | 60 |
| Production Reporting | 60 |

注： 通常、Reporting and Analysis コンポーネントは、EPM Workspace とともにバックアップする必要があります。17 ページの「EPM Workspace と Shared Services」を参照してください。

Reporting and Analysis ファイル・システムのバックアップ

▶ ファイル・システムをバックアップするには:

1 Reporting and Analysis をインストールした後、次のディレクトリをバックアップします:

- EPM_ORACLE_HOME /products/biplus
- EPM_ORACLE_INSTANCE /config/ReportingAnalysis
- EPM_ORACLE_INSTANCE /ReportingAnalysis
- EPM_ORACLE_INSTANCE /bin/ReportingAnalysis
- EPM_ORACLE_INSTANCE /products/biplus
- インストールおよび構成中にデフォルトを受け入れなかった場合は、Reporting and Analysis ファイルに指定したすべてのディレクトリ。

2 次のアイテムに対して、毎日完全バックアップを行うか毎日増分バックアップを行います:

- (Windows のみ)EPM_ORACLE_HOME/products/biplus/DDS 内のテンプレート、スタイル、パレットおよびコンポーネント
- ダッシュボードやスクリプトなどのカスタム開発リソース
- カスタム・コンポーネント、スクリプト、およびバージョン管理データ

- EPM_ORACLE_INSTANCE /diagnostics/logs/ReportingAnalysis
- EPM Workspace モジュールについては、EPM_ORACLE_HOME/common/raframeworkrt/11.1.2.0/wsearch 内の Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace 検索インデックス・ファイル
- EPM_ORACLE_HOME /common/raframeworkrt/11.1.2.0/wsearch
- リポジトリ・マネージャの場所

注： この場所(デフォルトでは EPM_ORACLE_INSTANCE/ReportingAnalysis/data/RM1)は、Reporting and Analysis 構成中に設定されます。

- 3 C:/Windows/Fonts (Windows)または EPM_ORACLE_HOME/products/biplus/fonts (UNIX)内の ANDALE フォント(ANDALE*.ttf)をバックアップします。

UNIX 環境では、このフォルダに ANDALE*.ttf ファイルだけでなく fonts.dir ファイルも含まれるため、フォルダ全部をバックアップすることをお勧めします。

Reporting and Analysis サービスの一時停止

注： 次の情報は、Oracle Hyperion Shared Services レジストリ内にあるサービスに関するものです。

バックアップを実行する前にサービスをシャットダウンするのではなく、メンテナンス・モードにすることでサービスを一時停止できます。このプロセスには、Oracle Hyperion Reporting and Analysis リポジトリ・スキーマ内の v8_service_mode テーブルに、v8_service_mode.name="MAINTENANCE" と v8_service_mode.value = 1 の値を設定する行を挿入する最初の SQL 文の実行が含まれます。

v8_service_mode.start_delay= minutes のデフォルト値を増やすことで、開始時間を遅延します。たとえば、setv8_service_mode.value=1 および v8_service_mode.start_delay=30 とした場合、30 分後に、サービスは要求を拒否します。

サービスの一時停止中は、次のような状態になります:

- ユーザーは、Oracle Hyperion Reporting and Analysis Framework サービスによって実行されるアクション(リポジトリ・コンテンツの参照、リポジトリ・アイテムの操作、ジョブの実行など)を実行できません。
- Reporting and Analysis Framework サービス・データベースへの読取り/書込み要求は処理されません。
- データベースを更新することになる Oracle Hyperion Reporting and Analysis Framework サービスのバックグラウンド・アクティビティ(リポジトリのガベージ・コレクションなど)は保留されます。
- イベント・サービス・アクティビティは保留されます。

サービス・ログ・メッセージが、サービスがメンテナンス・モードであることを示します。メンテナンス・モードがオフになったら、またメッセージが記録されます。

バックアップ後にメンテナンス・モードをオフにするには、`v8_service_mode.value` 設定を 0 に変更します。

Reporting and Analysis の復元

▶ Reporting and Analysis を復元するには:

- 1 バックアップしたコンポーネントを復元します。
- 2 ANDALE*.TTF フォントを、Windows の場合は (C:/Windows/Fonts) に、UNIX の場合は `EPM_ORACLE_HOME/products/biplus/fonts` に復元します。
- 3 データベースをリカバリします。これには、関連するすべてのサービスを停止し、バックアップに使用したパスを使用してデータベースを復元し、サービスを再起動します。

Dashboard Development Services

▶ 障害からの Dashboard Development Services の回復を使用可能にするには、次のコンポーネントをバックアップします:

- Dashboard Development Services ダッシュボードによって使用されるデータベース
- `EPM_ORACLE_HOME/products/biplus/DDS` 内のテンプレート、スタイル、パレットおよびコンポーネント
- ダッシュボード、スクリプト、バージョン管理データなどのカスタム開発リソース

第 2 章「共通バックアップ・タスク」を参照してください。

▶ 障害から回復するには:

- 1 バックアップされたすべてのコンポーネントを元の場所に配置します。
- 2 Oracle Hyperion Dashboard Development Services ActiveX コンポーネントの Windows レジストリ・エントリをバックアップおよび復元していない場合、次のコマンドを実行することによってそれらを登録します:
 - `regsvr32 EPM_ORACLE_HOME/products/biplus/bin/QIQZip.dll`
 - `regsvr32 EPM_ORACLE_HOME/products/biplus/bin/DDSUtil.dll`
 - `regsvr32 EPM_ORACLE_HOME/products/biplus/bin/DDSFw.dll`
 - `regsvr32 EPM_ORACLE_HOME/products/biplus/bin/DDSHelper.dll`
 - `regsvr32 EPM_ORACLE_HOME/products/biplus/bin/DDSListBar.ocx`
 - `regsvr32 EPM_ORACLE_HOME/products/biplus/bin/Srcvw3.dll`

- regsvr32 EPM_ORACLE_HOME/products/biplus/bin/MBSplit.ocx
- regsvr32 EPM_ORACLE_HOME/products/biplus/bin/UniBox10.ocx
- regsvr32 EPM_ORACLE_HOME/products/biplus/bin/UniBoxVB12.ocx
- regsvr32 EPM_ORACLE_HOME/products/biplus/bin/UniBox210.ocx
- EPM_ORACLE_HOME /products/biplus/bin/DDSDDebugProxy.exe
- EPM_ORACLE_HOME /products/biplus/bin/DDSDDebugSrv.exe

Financial Reporting

- ▶ Financial Reporting の回復を使用可能にするには、第2章「共通バックアップ・タスク」を参照して、関連コンポーネントをバックアップします。
- ▶ Financial Reporting を復元するには、バックアップされたすべてのコンポーネントを置換します。

Production Reporting

- ▶ Production Reporting の回復を使用可能にするには:
 - 1 次の Microsoft Windows ディレクトリをバックアップします:
 - %windir%/sqr.ini
 - %windir%/sqr64.ini
 - %windir%/libsti.ini
 - 2 EPM_ORACLE_HOME/products/biplus 内の次のディレクトリをバックアップします:
 - bin/SQR/...
 - common/SQR/...
- ▶ 障害後に Production Reporting を回復するには、バックアップしたコンポーネントを元の場所に配置し、データベースを復元します。

この章の内容

| | |
|------------------------------------|----|
| Data Relationship Management | 61 |
| FDM | 62 |
| FDME | 62 |

Data Relationship Management

Data Relationship Management は、ユーザーが作成するアプリケーションごとに個別のデータベースとスキーマを使用します。

▶ 障害からの Data Relationship Management の回復を使用可能にするには:

- 1 第2章「共通バックアップ・タスク」を参照して、関連コンポーネントとアプリケーション・データベースをバックアップします。
- 2 EPM_ORACLE_HOME/products/DataRelationshipManagement/server/configにある次のファイルをストレージ・デバイスに定期的にバックアップします:
 - drm-config.xml - そのマシンでホストされているすべての Data Relationship Management アプリケーションの接続情報
 - drm-helper.bin - そのマシンでホストされている各 Data Relationship Management アプリケーションのデータベース認証情報。

このファイルは、ファイルが作成されたマシンでのみ使用できます。Data Relationship Management コンソールを使用すれば、各アプリケーションのデータベース接続用パスワードを再入力して構成を保存することにより、drm-helper.bin を再生成できます。drm-helper.bin の再生成は、Data Relationship Management コンソールでのみ可能です。
- 3 カスタマイズされたロギングを構成した場合、drm-log4net.xml のバックアップを MIDDLEWARE_HOME/EPMSysstem11R1/products/DataRelationshipManagement/server/config に作成してください。
- 4 Web.Config を編集する場合は常に EPM_ORACLE_HOME/products/DataRelationshipManagement/client/drm-client-application/Web.Config をバックアップします。
- 5 自動プロセスの実行に使用される Data Relationship Management バッチ・クライアントのスクリプトをバックアップします。これらのファイルの場所は、バッチ・クライアント・プログラムを実行するコンピュータによって異なります。

- 6 Oracle Data Relationship Management 移行ユーティリティによって(アーカイブのために)作成された XML ファイルをバックアップします。これらのファイルの場所は、移行ユーティリティを実行するコンピュータによって異なります。

▶ 障害後に回復するには:

- 1 コピーされたデータベースおよび構成ファイルを元の場所に復元します。
- 2 データベースのパスワードを構成ファイルに再入力します。

FDM

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management では、作成するアプリケーションごとに別々のデータベースとスキーマが使用されます。

- ▶ クラッシュ後に回復を使用可能にするには、次のタスクを定期的に行います:
- 使用しているデータベースのベンダーのドキュメントを参照して、データベースをバックアップします。
 - アプリケーションのフォルダ構造全体(Inbox、Outbox、Data など)をストレージ・デバイスにバックアップします。
- ▶ 障害後に回復するには、ディレクトリを元の場所に復元し、データベース・ベンダーのドキュメントを参照して、データベースを復元します。

FDME

- ▶ クラッシュ後に FDME の回復を使用可能にするには、マッピング・テーブルおよびデータ・ステージング・テーブルを保管するデータベース・スキーマを定期的にバックアップします。
- ▶ 障害後に回復するには、ディレクトリを元の場所に復元し、データベース・ベンダーのドキュメントを参照して、データベースを復元します。

索引

A - Z

- BEGINARCHIVE コマンド(Essbase), 41
- Calculation Manager のバックアップと回復, 20
- Dashboard Development Services
 - 回復, 59
 - バックアップ, 59
- Data Relationship Management
 - 回復, 62
 - バックアップ, 61
- Disclosure Management, 52
- ENDARCHIVE コマンド(Essbase), 42
- EPM Workspace
 - 回復, 18
 - サービスの一時停止, 58
 - ファイル・システムのバックアップ, 17
- サービス、EPM Workspace と Reporting and Analysis の一時停止, 58
- ERP Integrator
 - 回復, 62
 - バックアップ, 62
- Essbase
 - BEGINARCHIVE コマンド, 41
 - LRO リンク、保守, 45
 - PAREXPORT コマンド, 43
 - Unicode アプリケーションと非 Unicode アプリケーション, 30
 - アーカイブ再実行データ、除去, 38
 - アーカイブ・ファイル情報の取得, 27
 - エクスポート後のデータの再計算, 44
 - エクスポート・データのリロード, 42
 - 環境変数、保持, 46
 - 計算スクリプト、エクスポート後の消去, 45
 - 手動でバックアップされたファイルの復元, 29
 - 実行中のファイルのバックアップ, 40
 - ディスク・ボリューム, 29
 - データのアーカイブ, 41
 - データのエクスポート, 42
 - データの並列エクスポート, 44
 - データ破損、回避, 41
 - データ・ファイルのバックアップと復元, 39
 - データベース
 - 大きなファイル, 44
 - 集約ストレージ, 46
 - 破損の解決, 46
 - バックアップの注意, 41
 - 復元, 42
 - データベースの読取り専用モードへの設定, 41
 - トランザクションの再実行、構成, 34
 - トランザクション・ロギング、使用可能にする, 32
 - トランザクション・ログ
 - 再実行, 36
 - 再実行のセキュリティの構成, 36
 - パーティション・データベースの使用, 38
 - 表示, 35
 - トランザクション・ログ・ストアの削除, 38
 - バイナリ・データのエクスポートとインポート, 42
 - バックアップおよびリカバリの概要, 21
 - バックアップ(手動操作), 39
 - パーティション・データベース
 - トランザクション・ロギングと再実行, 38
 - バックアップおよびリカバリ, 31
 - パーティション、バックアップ, 47
 - 必須ファイル, 39
 - ファイル・システムのバックアップ, 40
 - ブロック・ストレージ・データベース
 - 回復順序, 22
 - トランザクション・ロギングと再実行, 31
 - バックアップおよびリカバリ, 22
 - バックアップと復元の機能, 23
 - 復元, 28
 - リロード後のダーティ・ステータス, 44
- Essbase Studio のバックアップおよびリカバリ, 48

Essbase データベース
 エクスポート, 43

Essbase の操作(アーカイブ、停止、取消し), 41

Essbase ファイルのアーカイブ, 41

EXPORT コマンド(Essbase), 45

FDM
 回復, 62
 バックアップ, 62

Financial Close Management, 53

Financial Management
 回復
 アプリケーション・サーバーまたは Web
 サーバーの障害, 54
 データベース・サーバーの障害, 54
 バックアップ, 53

Financial Reporting
 回復, 60
 バックアップ, 60

Integration Services
 回復, 48
 バックアップ, 48

MaxL
 データのインポート, 45
 データのエクスポート, 43
 読取り/書込みモードへの切替え, 42
 読取り専用モードへの切替え, 41

OS。「オペレーティング・システム」を参照

PAREXPORT コマンド(Essbase), 45

Performance Management Architect
 回復, 19
 バックアップ, 19

Performance Scorecard
 回復, 55
 バックアップ, 54

Planning
 回復, 52
 バックアップ, 51

Production Reporting
 回復, 60
 バックアップ, 60

Profitability and Cost Management
 回復, 56
 バックアップ, 55

Provider Services のバックアップおよびリカバ
 リ, 48

regedit、コンポーネントのバックアップ, 15

Reporting and Analysis

一時停止, 58
 回復, 59
 ファイル・システムのバックアップ, 57

Shared Services
 ファイル・システムのバックアップ, 17
 データベース、Shared Services レジストリ, 11

Smart View
 回復, 20
 バックアップ, 20

Strategic Finance
 回復, 56
 バックアップ, 56

Windows レジストリ設定のバックアップ, 14

あ行

エクスポート・データ、リロード(Essbase), 42
 オペレーティング・システム設定のバックアッ
 プ, 14

か行

回復順序, 10

さ行

システム変数のバックアップ, 15

た行

ディスク・ボリューム、Essbase データのバック
 アップ, 40
 データベースのバックアップ
 Lifecycle Management , 9
 共通タスク, 11
 物理, 8
 論理, 9

は行

バックアップ・タイプ
 データベース, 7
 ファイル・システム, 9
 バックアップの準備, 11
 パーティション(Essbase)、バックアップ, 47
 ファイル・システムのバックアップ
 概要, 12
 タイプ, 9
 プラットフォーム(Essbase アプリケーション)、
 移植, 42